

2014年度 国際協力実習 フィリピン共和国 スタディツアー報告書



名古屋学院大学
外国語学部
国際文化協力学科

報告書―目次―

1. **スタディツアー概要（1）**
 スタディツアーの目的・参加者名簿・お世話になった方々
2. **訪問先の記録（6）**
 マニラ・セブ観光
 タガイタイ・ラサール大学
 ナボタス
 フィリピンで生きる子供たち
 J F C
 J I C A
 青年海外協力隊
 台風 30 号ハイエン
 ヨランダの爪痕
3. **参加者の感想（25）**
 佐竹 眞明(Dr. Masaaki Satake)
 人見 泰弘(Dr. Yasuhiro Hitomi)
 黒川 さくら(Sakura Kurokawa)
 名倉 萌奈(Mona Nagura)
 水田 莉句(Riku Mizuta)
 小澤 文音(Ayane Ozawa)
 後藤 春香(Haruka Goto)
 榊原 寿成(Hisanari Sakakibara)
 水谷 奈津子(Natsuko Mizutani)
 森田 聖佳(Seika Morita)
 山川 礼華(Ayaka Yamakawa)
 山本 泰裕(Yasuhiro Yamamoto)
4. **報告会などの資料（55）**
 報告会チラシ・学習成果報告会・ギャラリー

1. スタディツアー概要



研修ツアーの目的

- ①学生がフィリピンの政治・経済・社会・文化・日本との関係について説明できる。
 ②学生が日本と異なる国の現状を理解し、グローバル社会に生きる人間としての責任を考
 えることができる。

| 日程 | | | | |
|--|------|---|---|----------|
| 1 | 8.16 | 土 | 集合7:35 名古屋中部国際空港9:35発 PR473→マニラ12:45着 ペンション到着後、観光(リ サール公園 イントラムロス) | マニラ市内泊 |
| 2 | 17 | 日 | 9時発 10時ナボタスでオリエンテーション・質問事項決定 午後2時 住民宅訪問 インタビュー 生活と条件付き現金給付(CCT=Conditional Cash Transfer)について質問 午後4時 教会訪問 | 同 |
| 3 | 18 | 月 | 9時発 10 a.m. Asian Women Empowerment Project; 午後:ストリートチルドレン支援団体Kanluga sa ER-MA 訪問・子どもたちと交流 | 同 |
| 4 | 19 | 火 | 9時発:10 a.m JICA(事務所) 午後 マリガヤ・ハウス訪問 | 同 |
| 5 | 20 | 水 | 7時発:9時 タガイトイ着Visit to Puzzle Mansion. Buon Giorno Restaurant for the viewing of Taal Lake 10時同発 11:30 ラサール大学着 昼食: 13:00 Museum tour 14:00 Student Activities 17:30 Departure for Manila | 同 |
| 6 | 21 | 木 | 9時発 10 a.m. ILO訪問 午後2-3時半 エバリュエーション 以降 自由時間(Mall of Asia) | 同 |
| 7 | 22 | 金 | 10時発 専用車にて空港へ移動 マニラ12:50発PR2985→タクロバン14:10着→(バス3時間)→オ ルモック17:30頃着 (夕食を取りながら オリエンテーション) | 同 |
| 8 | 23 | 土 | オルモック 9時発 バランガイ・ラブラドールのBalion Elementary School 訪問 | オルモック市内泊 |
| 9 | 24 | 日 | オルモック 9時発 同バランガイ 農村部訪問 | 同 |
| 10 | 25 | 月 | オルモック (10 a.m.青年海外協力隊 事業地マタグオブ町Matag-ob役場訪問 隊員 寺澤萌さん にお話を伺う) | 同 |
| 11 | 26 | 火 | オルモック8:15 発→(フェリー)→セブ10:45(専用車にて市内観光 サント・ニーニョ教会、マゼラン・ クロス、道教寺院・ビバリーヒルズ) 18:00 フィリピン大学セブ校の学生と会食・交流 | セブ市内泊 |
| 12 | 27 | 水 | 8:30発:9:30~10:30マゼラン記念碑・ラブラブ像 11:00 Bluefines (Beach View Villa)着 昼食 フリータイム 15:00~16:00 エバリュエーション 16:10 同発 ホテル着17:10 18:00 モー ル・ロビンソン フリータイム(食事・買い物) 20:00 集合・帰宅 | 同 |
| 13 | 28 | 木 | ホテル8時半発:セブ・マクタン空港発PR2950, 11:00→マニラ12:15、PR438, マニラ13:50→名古屋 18:55 | |
| 宿泊先 マニラ首都圏マニラ市 ペンション・ナティビダド Pension Natividad, 1690, MH del Pilar St., Malate, Manila, TEL:63-2-521-0524 | | | | |
| レイテ島オルモック市 ホテル・ドン・フェリペ Hotel Don Felipe, Bonifacio St., Ormoc City, Leyte, TEL:63-53-561-9621 | | | | |
| セブ市内 サミット・サークル・ホテル Summit Circle Hotel, Fuente/Osmana Street, Cebu city, TEL:63-32-239-3000 | | | | |

参加者

学生

17F2046 名倉萌奈 Ms. Mona Nagura
17F2062 水田莉句 Ms. Riku Mizuta
18F2015 小澤文音 Ms. Ayane Ozawa
18F2026 後藤春香 Ms. Haruka Goto
18F2031 榊原寿成 Mr. Hisanari Sakakibara
18F2077 水谷奈津子 Ms. Natsuko Mizutani
18F2081 森田聖佳 Ms. Seika Morita
18F2085 山川礼華 Ms. Ayaka Yamakawa
18F2087 山本泰裕 Mr. Yasuhiro Yamamoto

17F2016 黒川さくら Ms. Sakura Kurokawa (8月16日～25日)

教員

佐竹眞明 Dr. Masaaki Satake
人見泰弘 Dr. Yasuhiro Hitomi



お世話になった方々

Acknowledgments

金光教平和活動センター

(KPAC=Konkokyo Peace Action
Center)

Ms. Harriet E. Escarcha

Asian Women's Empowerment Project/
ランパラハウス (Lampara house)

大森恵美さん

Ms. MARRISA

Ms. Tess

Kanlungan sa ER-MA

国際協力機構フィリピン事務所
NGO デスク 氏家洋子さん

マリガヤハウス Maligaya House
河野尚子さん

De La Salle University-Das Mariñas

Dr. Myrna C. Fajardo-Ramos, Vice
Chancellor for Mission, External
Affairs & Advancement
(University Linkages Office)

Mr. Nathaniel S. Golla, Director

Ms. Mary Grace N. Saflor,
Coordinator

International Labour Office (ILO)
Country for the Philippines

(National Project Coordinator,



Decent Work for Domestic Workers
Project)

Ms. Ana Liza U. Valencia

Barangay Labrador, Leyte

・ Balion Elementary School

Ms. Cristina Valencia, Principal

Mr. Gabriel Malciano, Barangay
Captain

青年海外協力隊

レイテ州マタグオブ町派遣 (村落開発
普及)

寺澤萌さん

Matag-ob, Leyte

Ms. Claudia C. Ibanez, Municipal
Agriculturist

セブ市 (Cebu City)

Dr. Maria Ballescas, Toyo University

フィリピンの概略

1.面積

299,404 平方キロメートル（日本の約 8 割）。7,109 の島々がある。

2.人口

約 1 億人（2014 年 7 月推定値、フィリピン政府人口委員会）

3.首都

マニラ（首都圏人口 1,155 万人）

4.民族

マレー系が主体。ほかに中国系、スペイン系及びこれらとの混血並びに少数民族がいる。

5.言語

国語はフィリピノ語、公用語はフィリピノ語及び英語。80 前後の言語がある。

6.宗教

国民の 83% がカトリック、その他のキリスト教が 10%、イスラム教は 5%。

7.平均寿命

男性 67 歳、女性 73 歳

8.識字率

93.4%（2003 年調査）

9.大学進学率

約 30%（職業訓練専門学校レベルのものを含む）

10. 元首

ベニグノ・アキノ 3 世大統領（2010 年～）

略史

14-15 世紀 イスラム教が伝わる

イスラム 王国スールー王国誕生

生

1521 マゼランの到着

1571 - 1898 スペイン植民地

1901 - 1935 米国植民地

1935-41 独立準備政府

1941-45 日本が占領（太平洋戦争）

1946 独立



地図 フィリピン全図

2. 訪問先の記録



マニラ、セブ観光

榊原 寿成 (Hisanari Sakakibara)

マニラ

マニラは年間を通して気温が高く、一番下がる12～1月でも、平均気温25℃ほど。だが、雨季と乾季が明確に分かれているため、6～10月（特に7～9月）には多量の雨が降る。排水の設備が整っていないため、一度に大雨が降ると町中が水であふれ返り、交通機関が完全に麻痺するといった光景も珍しくない。

また、毎年台風の通過点となっている地域でもある。特に7～10月に旅行する際には飛行機や船の便の欠航だけではなく、洪水や土砂崩れなどの危険もある。

マニラ市の中央に位置するのがリサール公園とイントラムロスだ。リサール公園は、58万㎡もの広大な敷地を擁する市民の憩いの場である。一方、そのすぐ北側にあるイントラムロスは、16世紀にスペイン人がフィリピン統治の根拠地とした城塞都市。周囲には城壁は形成され、かつては、スペイン人とメスチーソ（スペイン人との混血）のみが住むのが許されていた。

リサール記念像が建っているところは、フィリピンの国民的英雄であるホセ・リサールが19世紀末に処刑された場所で、地下には彼の遺体が葬られている。公園の中央には池があり、その右にあるのが中国庭園 Chinese Garden と日本庭園 Japanese Garden だ。



ふだんはとても静かだが、日曜には夕方から無料コンサートが始まり、公園内は多くの人々でにぎわう。

歩いていて日本と雰囲気はあまり変わらない。夜は暗い所は怖いと感じられる。そのため、一人で歩くことは危険と感じる。フィリピンは治安が悪く、とてもきけんなところというイメージがあったが実際に訪れてみるとフィリピンの方々はやさしく、人によっては日本語を使って商売をしていて親しみやすかった。

マニラでの観光スポットは韓国からの観光客も多く、カメラで写真を撮る姿を多く見た。夜以外は危険な場所は無いと感じる。

セブ

スタディツアー終盤で訪れたのは、日本人にとっても最もポピュラーなアイランドリゾートのひとつ「セブ」だ。セブ・シティには教会をはじめとして当時の古い建造物や史跡が数多く残っている。

奇跡を呼び、万病を治すと信じられたマゼラン・クロス。太平洋横断中にフィリピンに上陸した大冒険家、フェルディナンド・マゼランが、1521年に造ったといわれる大きな木製の十字架が納められている。六角堂に納められているが見学は無料だ。昔からこの十字架を煎じて飲むと病に効くと信じられていて、少しずつ削って持って帰る人があとを絶たなかったため、現在では堅い木で作ったカバーで覆われている。サント・ニーニョ教会はサン・オウガスチン教会とも呼ばれている、フィリピン最古の教会のひとつ。サント・ニーニョとは「幼きイエス」のこと。かつてマゼランがセブの女王に贈ったといわれるサント・ニーニョ像が納められている。16世紀にセブが戦火に包まれたとき、その焼け跡に傷ひとつつかずに横たわっていたという逸話がある。韓国などからの観光客がたくさん来ているため、耳をすませばいろいろな言葉が聞こえてくる。

丘陵地帯にビバリー・ヒルズと呼ばれる高級住宅街がある。ここに住んでいるのは、ほとんどが中国系の人々だ。この閑静な住宅地からセブ・シティやマクタン島が一望できる。



ビバリー・ヒルズに道教寺院という珍しい仏教のお寺がある。階段が99段あるのだが、雨の日は注意が必要だ。

マゼラン記念碑&ラブラブ像 16世紀キリスト教への改宗を要求するマゼランに対してラブラブが抵抗しマクタン島の戦いでマゼランはラブラブによって殺された。ラブラブは他国の侵略を阻止した英雄だ。これを記

念してマクタン島のマゼラン記念碑とラブラブの像が建てられた。

僕たちが泊まったサークルサミットホテルは、下にロビンソンスーパーがあり、とても便利だった。ホテルにはテレビも完備されていて日本のNHKも見ることが出来た。食事も色々あり、楽しめた。

ホテルやビーチはとてもきれいでまた行きたくなる島、セブであった。

Puzzle Mansion Taal Lake De La Salle University

森田聖佳(Seika Morita)

Puzzle Mansion

ギネスにも登録されている「パズルマンション」は一人の女性、ジナ・ギル・ラクトさんがたった一人で完成させてきた数々のパズルが計 1028 枚も飾られているパズルの博物館だ。ここは元々別荘として建てたものの多くの人々がラクトさんの完成させたパズルが見たいということで急遽、一般公開をすることになった。ラクトさんが完成した世界で最も多い 32,000 ピースのパズルを拝見してきた。他にも実際に中で見たものには、世界的にもよく知られている絵のジグソーパズルやサッカーボールのパズル、立体的な花のパズル、恐竜の形のパズル、今まで見たことのないようなパズルがならべてあった。お土産屋さんもありそこにも色んな種類のパズルがあった。次のタール湖へ向かう道中では放し飼いの牛を何匹も見た。町並みはマニラと比べると高い建物や建設中のマンションがいくつもあり、車の数も少し減り、ゴミなども少なく思った。

Taal Lake

タール湖では高台から世界最古の活動しているタール山を見てきた。タール火山の高さは約 300 メートル。タール湖はとても広く多くの山がタール山を囲っていた。カフェやお土産やさんがあり休憩するスペースも十分にあり、長くいても飽きない場所だ。



Da La Salle University

お昼少し前に De La Salle University ダスマリニャス校に着いた。着いてからはすぐにラサール大学の副学校長の方(Mr. Fajardo-Ramos)や所長の方(Ms.Golla)職員の方(Ms. Saflor)にお世話になり、会食や談話を 1 時間ほど楽しんだ。ご飯には白身魚とチキン、日本で言う春巻きのような揚げ物、バナナを用意して頂きました。とても美味しく頂きました。私たち名古屋学院大学の学生一人一人に名前入りのカード、バッジが用意されていて外には大きな幕があった。そこには名古屋学院大学のみなさま、ようこそと書かれていた。キャンパス内は学生で賑わっていて、屋台なども見られた。また、フィリピンでは雨が多く降るため長い廊下には屋根が付いていた。

ラサール大学内の博物館

この博物館はフィリピンの代表的な建築様式である石造りで作られており、一回以外は撮影が禁止されていた。中は広く、上級階級である人々の暮らしがわかるほど、家具や食器

などが高級感を漂わせていた。フィリピンはキリスト教が多いためか、お祈りする場所が家の中にあったことも驚いた。天井は細かい模様が付いていたが、その模様は地道に彫刻のように掘って作ったという。フィリピンは昔、スペインに占領されていたこともありスペインのような雰囲気の一部屋だった。

ラサール大学の生徒との交流

ラサール大学の生徒 30 人くらいの方々が待つ教室へ行き、そこでは国境を越えての生徒同士の交流を深めた。教室には楽器を演奏する方々がいて初めにラサール大学の生徒のみなさんが民族舞踊を私たちに披露してくれた。学生たちは何チームかにわかれ、いくつもの種類のダンスとそれに合わせた衣装も準備して素晴らしい踊りと演奏に私たちは魅了された。頭に籠をのせながらのダンスまた、bamboo を使った踊りも珍しくとても速い音楽と竹の動きに合わせて動く男女ペアの足はとても華麗に動き、すごく練習を積み重ねていた様子だった。メインで踊っていた男女のペアの学生が名古屋学院の生徒を引っ張り、踊りを教えてくれた。そのあと私たちも日本的な踊りである“よさこい”を披露した。ラサール大学の生徒の方々が用意してくださったパフォーマンスに比べ時間も少なく、衣装も着てはいなかったが、踊り終わって一緒におどろうと言うと、みなさん快く楽しそうによさこいを踊ってくれた。みんな笑顔になり、私たち名古屋学院の生徒も嬉しかった。

そのあとは日本から持ってきた大きな紙と絵具を使い、全員で手形アートに取りかかった。手形アートではみんなの手形でフィリピンと日本の国旗を完成させた。絵具を溶かす水から地面に敷く新聞紙まで用意していただいた。また、フィリピンの学生はみなさんととても積極的で社交的な人が多く私たちが準備していると何か手伝うことはないか聞いてきてく



れる学生が多く、私たちが言わなくても、自分たちで絵具の色分けのチームを作ってくれていたりした。すべてのパフォーマンスが終わると、軽い食事を用意してくださっていてジュースと揚げたバナナ、ビーフンをみんなで交流しながら頂いた。英語で会話をし、近い年齢同士の交流を深めることができた。会話を通して、日本のアニメや芸能人がフィリピンでも有名なことが

分かった。フィリピンでは雪が降らないらしく、雪の話や桜の話も話題に出た。私たちは今回このラサール大学の学生たちと交流したことで、国境、人種、言語を越えた友人をつくることが出来た。それにより日本という枠を越え世界に目を向けること、生まれた国が違う人と人の交流ということにおいても身近に感じられるようになった気がする。

ナボタス

名倉萌奈 (Mona Nagura)

私たちはマニラ首都圏において、漁港で知られるナボタス市を訪れた。そして、市の中で低所得層が集まるノース・ベイ・ブリバード・サウスというバランガイ（フィリピンの行政末端単位）を訪れた。ナボタスはプティングバト、サントニニョ、サンティアゴの三つの地区で形成され、それぞれ、6000人1200世帯、4200人700世帯、1800人300世帯で構成され、平均一家族六人で暮らしている。多くの職業は、漁業関係もしくはジブニーやサイドカーの運転手である。地域活動としては、NGO・金光教平和活動センター（KPAC）によって幼稚園が設立されている。電気も来ており、教会もある。また、自治体（市）、バランガイによって水道の供給、予防接種の実施、バスケットコートを設置などもされている。また、KPACは家庭の訪問、講習、クラブト、スクールバッグの配給などの教育支援も行っている。人々は年に一度のグローバル教育キャンペーンにも参加し、校外学習やパーティーの計画などもしている。現在、抱えている問題としては、失業と7~16才の児童労働、家庭内暴力、学業中退、若者（10代）の妊娠、犯罪と非合法活動（ギャンブル、麻薬）がある。

KPAC（金光教平和活動センター）

KPACとは、Konkokyo Peace Activity Center Incの略称である。ナボタスでは、3~6才の子供の幼稚園を運営し、今では約350人の子供たちが勉強している。さらに、パナイ島で学校を三つ作り、ミンダナオ台風（2012年）の時に学校支援などもしている。

条件付き現金給付（4P）

貧しい世帯に政府が現金を支給する制度のことである。4Pとはフィリピン語でPantawid Pamilyang Pilipino Program（フィリピン家族生計向上プログラム）の略である。7~14才（その後は18才まで延長）の子供を対象としていて、子供が学校に通い、母親が検診を受けていることを条件としている。また、社会福祉開発省は、親子一家養育セッション（Parents-Family Development Session）という講習を10回開いており、親はそれに参加しなければならない。そこでは避妊の方法や子育てなどが教えられる。

条件付き現金給付（4P）の予算の半分は、アジア開発銀行（ADB）や、世界銀行が資金援助をしている。残りはフィリピン政府の予算である。マニラに本部があり、総裁は日本人である。世界銀行やADBには、アメリカ、日本などが出資している。4P向けの資金についていうと、フィリピン政府は世界銀行やADBから借りたお金を返

済している。

しかし最近では、人々がこの 4P に頼ってしまい、働く意思が弱まってしまうという批判も起きている。

マリーナさん宅

彼女の家族は、サイドカーの仕事を持つ父アルバートさん、レストランで働く長男マークアントニーくん、求職中の長女アルベラさん、専門学校に通っている次女メリローズさん、高校 4 年生の次男マイケルくん、高校 3 年生の三男マックアルビくん、そして母マリーナさんの子供 5 人と両親で構成されている。父はネグロス島のドゥマゲティ、母はパナイ島のイロイロ出身で、二人とも家が貧しかったため大学へは行けず、高卒である。そのため、マリーナさんは子供 5 人が全員大学を卒業できることを願っている。上 2 人の子供はすでに大学を卒業している。彼女らは条件付き現金給付 (4P) を 2 人分受けていて、現在 3 人目を申請中だという。自分たちの収入だけでは、くつ、服、教材など学校に必要なものが買えないため、4P にはとても助けられているという。2 か月に 1 度、現金が給付され、マリーナさん家族は 2 年以上受けている。さらに、長男マークアントニーくんと次男マイケルくんは KPAC から奨学金をもらっており、毎年文房具や教材を買っている。これには、成績の平均が 100 点中 84 点以上を保っていることという条件がある。年二回 600 ペソの現金が給付される。また、KPAC の幼稚園の先生が補習をしてくれ、勉強もみてもらえる。彼女らに幸せを感じる時はいつ、と聞くと家族みんな一緒に居るときと、子供が大学を卒業できたとき、と答えた。辛いと感じたときは、と聞くと子供が小学生で小さかった頃、夫の収入だけで生活が苦しかったとき、と答えた。収入は 1 日 200 ペソ (500 円) だけだったのだ。そのため、マリーナさんはおかず売りの仕事を始めたという。近所に店を借りて、食材を市場で仕入れ、調理して売るのである。子供たちの夢を聞くと、長女のアルベラさんは職種は問わないが仕事に就くことで、次女のマリローさんはオフィスワークの仕事に就きたいそう。母マリーナさんの夢は、子供たちが稼いで今住む家を建て直してもらいたい、と言っていた。



KPAC (金光教平和活動センター)



マリーナさんの家

フィリピンで生きる子供たち

ストリートチルドレン支援団体 Kanlungan sa ERMA

山川礼華 (Ayaka Yamakawa)

Kanlungan sa ERMA はフィリピンの大きな問題であるストリートチルドレンを支援する団体だ。施設はマニラにあり、2階建ての建物であった。私たちが施設を訪れた際、数人の子供たちが待ちきれず迎えに来てくれた。この施設は Level1 であり最大受け入れ人数は20人であるが今は15人、内訳女子9人、男子6人が共同に生活している。子供たちが施設に滞在できる期間は10ヶ月。またこの施設以外にも Level2 という施設がありそこにはガールズホームに女子20人、ボーイズホームに男子19人が生活している。こちらは安住し学校に通っている。勝手に収容しては誘拐になってしまう為、法律を作った。

ここの施設の活動内容は、まずストリートチルドレンにアプローチすることから始まる。街頭で生活している子供のもとへ訪問し教育する。また親から虐待などを受けフィリピン総合病院で保護されていた子供を預かることもある。暴力を振ってしまうと自覚のある親が自ら預けにくるケースも少なくないそうだ。施設での仕事は4つの分野に分かれている。社会福祉、保健衛生、先生、家事だ。まず社会福祉は包括的なアプローチを行っている。保健衛生は子供たちの健康に関する管理を行っている。先生は英語などの教育をしている。家事担当者は子供たちのお母さん替わりである。

収容期間が終了すると普通の生活へ戻る生活訓練が始まる。まず子供を親の元へ返す前、親の暴力、家族関係、経済状況などを調べる。その後、子供自身に家へ帰りたか確認を取る。しかし親の経済状況などで家へ帰せない場合もあるそうだ。確認後家へ帰ることを希望する子供がいればアフターケアを行う。アフターケアとは第一土曜日に親を訪ね子供の成績や、親子関係をモニタリングする。かつて Kanlungan sa ERMA で生活していた子供の10人が大学生になり、何人かは卒業もしている。また Level2 のボーイズホームにある20ヘクタールのコーヒー豆畑で収穫したコーヒー豆を使って卒業生が KSEM Caffé を運営している。

ここで生活する子供たちはみんなが笑顔で、私が施設へ訪れる前に見たストリートチルドレンたちとは違った。街頭にいる子供たちはどこか悲しそうだったが、施設で生活する子供たちはそんな過去を忘れるほど元気な様に見えた。



I L O International Labour Organization

I L OではAna Liza U Valencia さんにお話を伺った。I L Oとは児童労働をなくすために活動している団体だ。そこで実際にある児童労働について聞いた。子供たちが行う主な仕事は洗濯、料理、洗車、漁業、鉱山・土砂作業などだ。そういった仕事をする家庭は貧しく親が子供を売り、お金の換えることも少なくない。また洗濯や料理をする子供は住み込みで働く。雇側は上流家庭だけではなく中流から低層までもが雇う為、仕事をしても子供には給料は出ない。そういった子供たちのことを家事労働者と呼ぶ。しかし昨年1月に法律が制定され小学中学の教育を受けられるように雇い主がするように定められた。またフィリピンでは15歳から17歳の間は高校生であるため合法的に働くことができる。しかし20時から8時は働くことができない。それは基礎的な学力をつけ将来立派な仕事に就かせるためだ。

私が話を聞いた中で印象に残った仕事は鉱山・土砂作業だ。子供たちは大人たちより体が小さく作業しやすい。そのため鉱山の奥で仕事をさせられるのだ。もちろん奥に入れば入るほど危険になる。また空気が薄くなるため圧縮空気を子供に吸わせる。しかし、子供にホースを咥えさせるだけの全く安全ではないものだった。そのことによつて鼻と喉をやられてしまう。水銀にさらされ、鉛などで鉛中毒になったとしても子供たちは病院でまともな治療を受けることはできない。これは強制労働であり子供たちは大人の言うことを聞かざるを得ない。

そこでI L Oは国際的な条件、協定に基づいて各国が活動している。またI L Oでは4つの柱を定めている。4つの柱とは基本的人権、雇用、社会的保護、社会的な対話だ。加盟国ではない場合は国に勧告をする。社会的保護で世界的に雇用を増やし子供ではなく親に職を与え児童労働を辞めさせ権利を守るなどの活動をしている。フィリピンでは約293万人の子供が働いており、その半分は男の子だ。家計を助けるために働いている子供や家の農作、自分の家族のビジネスの中で働いている子供もいた。

世界的には自動労働者は1億6千8百万人おり、3分の1に減らす目標はまだ達成できていない。それほど厳しい問題であることが分かった。

日本では幼い子供が働くことはない。また親が子供を売ることなど考えられない。ただし児童虐待は存在する。とはいえ自分たちが何不自由なく大学に通えることは当たり前ではなく、恵まれていることを改めて実感した。



JFC(マリガヤハウスとランパラハウス)

後藤 春香 (Haruka Goto)

私たちは、JFCと言われる日本人とフィリピン人の間に生まれた子供と、その親を支援している団体に訪れた。滞在2日目に日本のフェアトレード団体の一つであるアジア女性自立プロジェクトと連携をしているランパラハウス、滞在3日目にマリガヤハウスを訪れ、実際にJFCの方やその親たちに話を伺った。

JFC 問題

JFC...ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン(JFC)。日本人とフィリピン人の間に生まれた混血児のこと。父親が日本人、母親がフィリピン人のケースが多い。

JFC 問題...1980年代に急増したフィリピン人女性のエンターテイナーと、日本人男性の間に生まれた子が多く、現在そのようなJFCは10万人～20万人ほどいると言われている。JFCが生まれた後に様々な理由で男女関係が破綻したり、理由が分からないまま突然男性からの連絡が途絶えてしまうことで、養育を放棄されたり、父親だということを認知してもらえない状態になり、貧困や社会的差別に苦しんでいる、というのがJFC問題である。

AWEP (アジア女性自立プロジェクト)

1994年に創設し、アジアの女性をサポートする活動を主に行っている日本の神戸のNGO団体である。フィリピンの他にも、インドネシア、ネパール、タイなどの女性のサポートも行っている。フィリピンでは、JFCの親のサポート、出稼ぎをしている人々の帰国をサポートする活動や、海外に出て出稼ぎをするのではなく、フィリピンでの居場所、働く場を作る活動を行っている。

ランパラハウス

ランパラハウスとは、マニラでフェアトレード製品を生産し、販売も兼ねたショールームの運営も行っている団体である。主にJFCのシングルマザーである女性三人で運営している。女性たちの居場所づくりと、ネットワークの拡大を目指している。昔はJFCのシングルマザー達が集まり作った“WIN”と呼ばれるグループ



ランパラハウスにて

で製品を生産し、日本に向けて販売していた。しかし、“WIN”の活動拠点であった場所では、販売が難しいことから、活動拠点をマニラに移し、2012年の2月にランパラハウスでの活動が始まった。インターネットを通して海外へのフェアトレードの販売も行っているが、ランパラハウスや、マカティで開かれる日曜日のバザールなどでも製品を販売し、フィリピンでのネットワークの拡大を目指している。販売している製品はすべて手作りで、日本の着物や帯、フィリピンの伝統的な布や、バナナの糸や、パイナップルの繊維といったナチュラルな素材を使用し、衣装や、小物、雑貨を作っている。

マリガヤハウス

マリガヤハウスとは、タガログ語で“しあわせの家”という意味が込められている。日本人の父親と、フィリピン人の母親との間に生まれたJFCの子供たちの法的支援を行っている団体。日本に住んでいる父親を探すことや、父親から認知されない子供の認知の交渉、また養育費の交渉や日本国籍取得支援なども行っている。子供の権利を第一に考えた法的支援を行っている。しかし、支援はあくまで法的なもののため、精神面のサポートや、相手の求めている100%の支援はできない。また、全員を支援の対象とするのは難しく、話を聞き交渉や調査の条件を満たしているかなどを審査し、実際支援のできる20~30%の部分で支援を行うことができない。マリガヤハウスからの直接交渉もできないため、弁護士を通してでしか交渉ができない。

父親を探す場合は、フィリピンに在住の母親が父親のパスポートのコピー、免許書、名前、住所、生年月日、親子関係のわかるもの、携帯電話の番号などから探し当てる。名前は、漢字名が分からない場合が多いので難しい。これらをもとに父親の居場所を割り当て、マリガヤハウスが手紙を送り、その後裁判を起こすケースもある。また最近では、DNA鑑定を行うこともあるという。マリガヤハウスは、子供の権利を守るために活動をしている。マリガヤハウスで10年以上活動を続けてきた河野尚子さんは、「父親には義務をきちんとはたしてほしい。」と話していた。

河野尚子さんの話を伺い、この問題についてより日本で広めていかなければならないと改めて感じた。



マリガヤハウスにて

左側：河野尚子さん

JICA in the Philippines

水谷 奈津子 (Natsuko Mizutani)

8月16日から28日の間、スタディツアーとしてフィリピンを訪れた。4日目に私たちはフィリピンと日本の国際協力を繋ぐ、マカティ市にある JICA のフィリピン事務所を訪問した。そして実際に日本人の職員である、氏家洋子さんに JICA のフィリピンでの活動内容や国際協力についてお話を伺った。

JICA とはまず、**Japan International Cooperation Agency** の略。

2003年10月1日に独立行政法人国際協力機構とし誕生した。二国間援助を担う機関と約150ヶ国の地域に援助をしており、毎年約1兆円の開発援助をする実施機関である。



国際協力と活動

フィリピンの政治は極めて良好だが、発展途上国である。輸出先は日本が1番であり、日比経済連携協定はフィリピンにとって二カ国間初のことであり日本とフィリピンは深く関係のある国である。

発展途上国の経済及び社会の開発、復興は経済の安定に寄与することを通して、国際協力の促進と我が国及び国際

経済社会の健全をすることが大切だそうだ。

JICA の中では技術協力、無償資金協力、有償資金協力(円借款)の3つがあり、ODA(政府開発援助)を JICA が担っている。市民参加協力(青年海外協力隊)や国際緊急援助隊などを JICA が担当している。

フィリピンでの活動内容と目的は

- 1) 投資促進を通じた持続的経済成長
- 2) 脆弱性の克服と生活基盤の安定
- 3) ミンダナオにおける平和と開発の関係支援

この他にも今までに円借款により新イロイロ空港建設、メトロマニラ立体交差、アガスガス橋の建設など行ってきたそうだ。

ミンダナオ支援

フィリピンで行った活動として3つ目にあげられたミンダナオの支援について詳しく伺った。

2006年にJICAは国際停戦監視団への職員の派遣と、紛争影響の地域にたいする平和構築及び開発支援を開始した。ミンダナオは農業に適した土地や豊富な地下資源を有するとして、開発のポテンシャルが高かった。そのため農業と鉱業を中心に日本の企業も注目をしている。

主な支援内容は人材育成、地場産業振興とインフラ整備、和平交渉の側面支援だったそうだ。

どのような支援が必要なのかは担当省庁からの要請に基づいている。その上で実際に調べてプロジェクトを決める。しかし、実施までに2年かかってしまいギャップが生じているそうだ。有償資金協力については現在、途上国からの返済の方が日本の貸付額より多い。そのため、いわば黒字という利益が上がっている。そのお金は全て国、財務省に渡っておりJICAで使い回すことはない。いずれにせよ、日本政府は貸付によって利益をあげているのが現状である。こうした点も日本の国際協力と考える点で見落とせない。

NGO デスク

氏家さんの仕事はこのNGOデスクワークであり、主に私たちが行って伺ったこのスタディツアーなどの受け入れ、フィリピンでのNGO主催のイベント事業の手伝いなどだそうだ。

これから事業を立ち上げるという日本の団体のサポートなども行っているそうだ。

実際に私たちの税金が使われて、途上国の役にたっていることを知り嬉しいと思う反面、途上国の現状と日本政府には利益があることを知り深く考えさせられました。直接JICAの事務所でお話を聞くという貴重な経験ができてよかったです。



青年海外協力隊

小澤 文音 (Ayane Ozawa)

私は、日本人が実際海外でどのように活躍しているかを知るために独立行政法人国際協力機構 (JICA) が実施する青年海外協力隊で働いている現役の協力隊員に話を伺った。

青年海外協力隊の制度

青年海外協力隊とは JICA が実施する 2 年間の海外ボランティアとして開発途上国へ派遣する制度である。満 20~39 歳までの健康で日本国籍を持つものを募集対象としている。職種は 9 部門の中に 120 以上のものがあり、派遣国先も 80 か所ある。

フィリピンに派遣されている協力隊と配属先

私たちはフィリピンレイテ州オルモック市マタグオブ町にある村で活躍しておられる協力隊の寺澤萌さん(23)にお会いした。

コミュニティ開発は資格や技術を問わない職種のひとつである。また、活動内容も現地のニーズにこたえて変わるので様々なものがある。

寺澤さんは、大学時代にアフリカの農業開発について研究していたが、実際に現地に行ってみないとわからないと考え、大学を卒業してすぐに青年海外協力隊に応募したそうだ。

寺澤さんは現在、カカオ栽培という形でコミュニティ開発を行っている。



青年海外協力隊員 寺澤萌さん

活動内容

寺澤さんは現在カカオ栽培の普及を行っている。元々寺澤さんが活動を行う前にいた協力隊の人の活動を引き継いだそうだ。収穫したカカオからチョコレートの粉づくり、古くなったカカオのリハビリテーション、カカオ栽培のセミナーの実施、農園の設置、苗を配った人のモニタリングなどの活動を行っている。

台風ヨランダの影響で一時的に活動を停止したときがあったが、現在はカカオ栽培を復活させ台風被害支援も行っているそうだ。また、課題も多くボランティア隊員が主体になって活動している面があり自分が活動をやめると何も進まなくなるところや、一人であまり行動したがらなく誰かと一緒に行動するところなどがある。村ではカカオが道端に生えているのが日常なので“栽培”という点を意識させるのも苦労したという。

寺澤さんは台風ヨランダの被害などとても苦労して過ごされていたので逆にうれしかったことを尋ねると、大学を卒業してすぐボランティアにきましたといってもすぐに村人が受け入れてくれるところや、自分の顔を見てカカオにつながるのがうれしいと語っていた。

任期を終えたらどうしたいかと尋ねると自分は大学を卒業してすぐに青年海外協力隊に入ったのでお金を稼ぐという感覚がわからないまま農業支援を行っているから任期が終わったら就職活動をしてお金を稼ぐという感覚を知りたいそうだ。

また、村全体の様子は住宅一つにしても貧富の差がはっきりとみてとれた。村の人々はみんなとても明るく親しみやすかった。

私個人の感想は、台風や言葉などたくさん大変なことがあったのにそれでもやるっきゃないと気持ちを切り替えて活動をしている姿に尊敬の念を抱いた。



カカオから作られたチョコレート（ココア飲料） 栽培しているカカオ

台風 30 号ハイエン（フィリピン名ヨランダ）

山本 泰裕（Yasuhiro Yamamoto）

平成 25 年（2013 年）11 月 4 日に発生した台風 30 号ハイエンは、フィリピン中部を横断し、フィリピンをはじめ多くの国に多大な被害を与えた。フィリピンの中でも被害が多く、レイテ島のタクロバンを中心に、大きな被害を受けた。

「フィリピン国際災害リスク削減管理委員会（NDRRMC）」の発表によると、死者数 6,201 人、負傷者数 28,626 人、行方不明者数 1,785 人、総被災者数 1,607 万 8,181 人に及んでいる。被災後すぐに食料や生活用品などの支援が必要とされ、フィリピン国軍や、フィリピン赤十字などからの支援を受けた。フィリピン国内だけでなく、日本を含め多くの国がフィリピンへの支援をしている。被災後の今もなお支援は必要であり、多くの方が支援を求めている。

私たちはフィリピン内でも大きな被害を受けたタクロバン市を通過し、オルモック市にあるバリオン小学校（Balion Elementary School）へ訪問した。タクロバン空港は台風により更地になっており、ほとんどがむきだしの状態であった。空港を出てオルモックへ行く最中多くの台風の傷跡が残っており、路上には仮設のテントが設置されており、多くの方が避難生活を強いられていた。そのほかにも台風によって折られたヤシの木や、路上には未だ撤去されていないがれきや、大きな貨物船が放置されていた。

（台風によって折れたヤシの木）



フィリピンでお世話になった KPAC という団体の代表の Ms, Harriet E. Escarcha の話によると、台風当日のオルモックは増水でほとんどの家が浸水しており非難せざるを得ない状況であったという。

実際に訪問したバリオン小学校（1947 年創立）はオルモックから 23 km 離れており生徒数 213 名とあまり大きい学校ではない。ここで校長先生から台風当時の状況を伺えた。台風当日生徒たちには安全のため学校には来させなかった。バリオン小学校の生徒には幸運にも死者はおらず、負傷もちょっとした怪我で済んだという。学校での被害としては教科書類や、先生方が使うパソコンは全て流され、学校に



台風を思い出して涙を流す生徒

立って歩くと危険なため這いつくばって避難所まで行った子や、ヤシの木が家に倒れてきて家が壊れたので、マンゴーの木の下に隠れたりした子もいたそうだ。台風通過後 1 か月近く学校で避難した生徒もいた。現在も家がなく避難所や、親せきの家などに住んでいるといったケースがほとんどであった。

次に子供たちに台風当日の気持ちを伺った。ほとんどの生徒が恐怖を感じていた。はじめて体験する大型台風で、今でもトラウマで思い出すと不安になる子や、中には本当に死んでしまうと思ったという子もいた。

台風の後、国際 NGO のマーシーマレーシアなどの支援により飢えをしのぐことができたそうだ。今もなおフィリピンは支援を必要としており各国から支援を受けている。

この子供たちの感想からもわかるように台風 30 号ハイエンはフィリピンに甚大な被害をもたらしたのである。

は何も残ってない状況であったそうだ。それにより現在の事務仕事は全て手書きである。私たちが学校として支援してほしいものを聞くと、やはりパソコンや教科書、本類、文房具などが挙げられた。

次に私たちは、子供たちに台風当日の話を伺った。当時のことを聞くと泣き出してしまう子供もおり、精神的に弱っている様子が伺えた。当時のことを話してくれる子の中には台風当日家が飛ばされ運河の橋の下に身をひそめたり、

ヨランダの爪痕

水田 莉句(Riku Mizuta)

12日間のフィリピン・スタディツアーでレイテ島オルモックを訪れた際、自分達は村で生活している2つの家族を訪問した。2つの家は互いに農業をしているという共通点があったが、一方は自作農、もう一方は労働農家をしている家族だった。自分達は半分に分かれ、それぞれ家を訪問し話を聞くことが出来た。

まず、自分達が訪れたのはマカリオ・バットウデュオさん宅。彼は1.5ヘクタールの土地を持っている自作農だ。元々、彼の父が4.5ヘクタールという広大な土地を持っていて、その土地を3兄弟で1.5ヘクタールずつもらい受けたそうだ。農作物は、1度の収穫で1250kg穫れるそうだが、借金を返す時以外は売らない、それが彼らのスタイルだ。仮に売ってしまうと、彼らの自身の食料が十分に確保出来なくなってしまうからだ。作物を作る他には、豚と鶏を飼って生計を立てている。特に鶏に関しては、闘鶏用、食用、採卵用の3種類を飼っていた。とりわけ闘鶏は育てるのに金がかかるため、闘鶏を飼っている家はフィリピンでは比較的裕福な家庭と言える。彼の家庭は土地を自分で所有しているため、比較的生活が安定しているのだ。ところが、台風ヨランダが来た時、彼らは様々な被害を受けた。ヨランダが来た時、彼ら家族は近所に避難してきた人と家の中で寿司詰め状態だったと言う。彼らの家は窓もドアもないコンクリートで、出来た家ですべて安全だとは言えない。しかし、ヨランダの中、屋根こそ壊れたものの全壊せず、家族と避難してきた近所の人々全員がよく無事だったと感じたのが率直な感想だ。しかし、被害はそれだけではなかった。土地は荒れ、作物は1250kg収穫出来るはずが、500kgが収穫出来なくなってしまったのだ。土地がすぐには使えないため、仕事を探さなければならなかった。そのため、マカリオさんはILOの緊急雇用を受けて、15日間働き、2500ペソを得ることが出来た。ヨランダの後、TSUCHI、Oxfam、DSWDという3つの団体からサポートを受けたこともあり、少しずつ回復はしてきているそうだ。しかし、彼は今現在を幸せを感じられてはいない。妻がヨランダの後、病気になってしまったからだ。お金もないため薬もまともに買えず、毎日が苦しいと語っていた。元々は安定した生活を送っていたが、ここまで苦しい生活を送ることになってしまうなどのヨランダの恐ろしさは計り知れないものであった。

一方で農業労働者として働いているルビー・ピラピルさん(32)、アルモン・ピラピルさん(29)夫婦。週に4日、1日150ペソで農業労働をしている。田植えがない時期は草刈りやバナナ、ココナッツを売ることや借金で生計を立てている。CARP(包括的農業改革法1988年)と言う、土地を譲り受けられる政策の受益者になりたかったが、前の村長の意向で彼らの家族は対象外となってしまった。お金が無いために十

分な食事が出来ず、栄養不足で妻の母乳が出ないためお金のかかる粉ミルクを使うこととなった。夫の給料は低いため、エビの塩辛や小魚の干物といったしょっぱいものばかり食べていたために、尿路感染症になってしまったという。それでも、収穫しお金が入る時は妻や7人の子ども達と一緒に幸せを感じる事が出来ると語っていた。子ども達にはそれぞれ、医者、軍人、教師などの夢があり、夫婦は子ども達に貧しくても学校には行かせてあげたいと願っていた。台風ヨランダが来襲した当日は近所の家に避難していたそうだ。ヨランダの影響で家は全壊してしまい、家を立て直すために水牛を1万7000ペソで売ることとなってしまった。被災者として、赤十字やオルモック市の社会福祉課で様々な物資を支給されたが、仕事ができ、収入も増える要素となる水牛が今1番欲しいそうだ。

2つの家庭では生活レベルやヨランダの影響、被害の度合いなど、様々な面で異なっているが、互いにヨランダが残していった爪痕で今も苦しんでいる。ヨランダから既に半年以上経っているが完全回復する日は程遠く、今の状況ではその兆しも見えない。その中で自分達には何が出来るか。これについてフィリピンではもちろん自分達先進国側もどう支援していくかが課題であると考え。そして、何より一刻も早い復興を自分は願っている。



3. 参加者の感想



人びとの声に触れて—2014年フィリピン訪問

引率教員 佐竹 眞明 (Masaaki Satake)

2005年に開設した国際文化協力量科の伝統的プログラム・国際協力実習。2007年度のフィリピン実習で始まり、08年マレーシア、09年タイ・ラオス、10年ラオス、11年東ティモール、12年フィリピン、13年タイと続いてきた。今回のフィリピン訪問で8回目となる。私は13年度を除き、ずっと引率に携わってきた。今年の参加者10名を含め、これまでの実習参加者はリピーターを入れて総数127名である。学科の卒業生は2013年度末で275名であり、実習参加者はその半分弱、相応の多さと言える。

今回、日本から全行程に参加した学生は9名。そして、ラサール大学ダスマリニャス校に留学中の学生1名が初日から10日目まで参加した。研修先はいずれも東南アジアの発展途上国である。気候は暑いし、風習、言葉、文化も異なる。渡航歴のある学生ばかりでなく、この研修で初めて外国へ、という人もいる。本人や保護者にとって不安もあろう。引率教員としても、安全管理に気を使う。健康、食事、安全を含め、手を抜けない。費用面でも学生は渡航・滞在費を負担する。旅行会社や民間の国際協力団体(NGO)による研修旅行より費用は抑えられているが、学費への追加支出である。保護者にとっても負担は大きい。アルバイトで費用を稼いで、参加する学生もいる。そうした事情を踏まえると、参加者や参加者を支える保護者の真剣な思いを大切にしなければと、毎回感じる。

他方、教員としては、夏は自分の研究・調査に時間を費やしたい時期でもある。しかし、熱い思いを胸に抱きつつ参加する学生の熱意に打たれる。そして、今回のように、現地で何回もエバリュエーションの機会を設け、学生の意見、感想を聞いていくと、若い彼ら、彼女らが様々なことを旺盛に吸収しており、自分の素直な感情を大切にしつつ、実情を理解しようとしていることがわかってくる。あれこれ事前に準備し、訪問中や訪問後も手のかかる研修ではあるが、「教育効果」は無視できない。

付言すると、私はフィリピン研究を専門にしており、自分が関心を持ち、そして、参加学生にも考えてほしいテーマを研修に取り入れるようにしている。今回の研修でも国際協力への理解を中心としつつ、低所得層の「貧困問題」、ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレンに関連する「国際結婚・国際移民」「日比関係」といった事項を入れた。引率教員も訪問・見聞から学べるように工夫されているのである。

次に今回の研修について思いつくことを記していきたい。

実習2日目に訪問したナボタス市。マニラ市の北に位置し、漁港のある町として知られる。マニラ湾沿いの道路では拡張工事が進んでおり、立ち退かされた住民が廃材

マリーナさん（後列右端） アルバートさん（中列右端）とともに

を使って建てた家が道脇に並んでいた。訪問先はバランガイ・ノースベイ・ブリバード・サウス（「北港大通り南」。バランガイは最小の行政単位）。世帯数 2200、人口 12,600 人。住居が密集する低所得層地区である。私たちは2グループに分かれて住民に話を聞いた。私が訪れたのは妻マリーナさん（42）、夫アルバートさん（44）夫婦のお宅である。家はセメント・ブロックを積み立てたものだった。マリーナさんは惣菜をつくり店で販売している。アルバートさんはサイド・カー（自転車に客車をつけた輪タク）の運転手。子どもは5人だという。長男（23歳）は大学を卒業し、レストランで働く。長女（20歳）は大学を卒業したばかりで求職中である。次女（17歳）は来年大学を卒業予定だ。三女（16歳）はハイスクール4年、次男（14歳）は同3年。さらに、身寄りを失った夫の姉の娘（10歳）も引き取り育てている。



マリーナさんが語る。「子どもが小さい頃、大変だった。まだ、私も惣菜を売ってなかったから。」 夫の収入は200ペソ（約500円。2014年11月11日現在1ペソ=2.56円）である。今はマリーナさんが商売をしているので、以前より家計が楽になったという。そして、政府による貧困層向け現金給付を受けているそうだ。これは4Ps=Pantawid Pamilyang Pilipino Program[フィリピン家族生計プログラム]と呼ばれ、子どもの就学、母子検診を条件に現金を受け取るという制度である。別名・条件付き現金給付（Conditional Cash Transfer=CCT）とも呼ばれる。さらに、金光教平和活動センター（KPAC）からの奨学金も受給している。こうして、夫婦が共稼ぎし、政府支援、NGO支援を受ける中で、子ども全員が教育を受けてきた。マリーナさんは「自分たちは高卒だが、子どもたちは大学に行かせたい。二人の子どもが大学を修了しことが最上の喜び」という。これからは仕事に就いた子どもたちに家を直してほしいとも述べていた。子育ても半分終わり、少し一息ついている、という印象を持った。

対して、生活が厳しいと感じたのがレイテの農家だった。実習の9日目、レイテ島



長女を抱くルビーさんと

西岸オルモック市にて、市街地から車で1時間余りの農村地帯バランガイ・ラブラドールを訪ねた。まず、バランガイ・キャプテンによると、世帯は549、人口2324人、面積606ヘクタールであり、野菜、米、バナナ、ココナツ、サトウキビを中心とする農業地帯だという。1988年に始まった政府による農地改革（農地の分配）は一部の米作地30ヘクタールにし

か、適用されていない。他は地主が反対して、実施が滞っているようだ。そこで、私たちはナボタス同様、2 グループに分かれて自作農と農業労働者の家を訪ねた。私は学生と一緒に農業労働者のお宅を訪ねた。

妻ルビー・ピラピルさん (32)、夫アルモン・ピラピル (29) 夫婦である。農地を所有せず、アルモンさんは米作地で労働者として働く。ルビーさんは専業主婦だ。子どもは7人いる。長男 (10)、次男 (9)、三男 (8)、4男 (7)、五男 (4)、長女 (2)、六男 (6 か月) である。女の子の誕生を待っていたところ、男の子ばかり生まれたようだ。7 人目の出産後、ルビーさんは不妊手術を受けた。アルモンさんは尿路感染症のため熱を発し、隣の部屋で休んでいた。アルモンさんは田植え、その2か月後、雑草取り、その1か月～1か月後、収穫の労働に従事する。労働は日収で150ペソ (375円)、週に4日程度だという。ちなみに、2000年の「国連ミレニアム宣言」に基づき、まとめられた「ミレニアム開発目標 (MDGs)」には、2015年までに1日1ドル未満で生活する人口比率を半減させるという目標があった。MDGsには国際連合全加盟国193と国際機関23が合意し、達成努力を続けている。その絡みでいうと、ピラピル一家はまさしく「貧困人口」である。収入を平均すると、375円を9人で割り、一日一人が使える額は42円なのだ。収入のない日は家の周囲のバナナやココナツを売るというが、極めて苦しい生活を送っているように見えた。飼っている鶏は自家消費のためである。別のグループが訪れた自作農の家では闘鶏用の雄鶏も飼っており、余裕がある。その自作農は農業労働者を雇う側である。ルビーさんによると、「大変なのは子どもが病気の時です。夫が病気の時もつらい。」夫は6月にも同じ病気で1週間寝込んだ。今も熱が出て、3日目だという。診察は受けるが、薬を買う余裕はない。上述の4Psは受給しており、2か月ごとに1000ペソ振り込まれる。だが、前の村長の時、農地改革の受益者対象から外されたため、改革の恩恵は受けていないようだ。他方、「幸せなのは収穫の時です。借金を返すことができ、現金でモノを買えるから」という。2013年11月、台風ヨランダが来襲した際は屋根や壁が飛ばされ、近所のコンクリートの家に逃げ込んだという。今、何がほしいですかと学生が質問すると、「水牛が必要です」。屋根の修復のため、貴重な水牛を17000ペソで売ったが、水牛がいれば、田んぼの耕作ができ、収入につながるからである。電気はなく夜は灯油ランプを用いる。電化製品や携帯電話もない。水は井戸を使う。2012年6.8%、13年7.18%という具合に、近年フィリピンは高い国内総生産の成長率を示しているが、成長の恩恵を受けられない層が再生産されている。

日本政府の国際協力については、国際協力機構 (JICA) にて、氏家洋子さんから JICA の活動に関して説明を受けた。日本政府によるインフラ支援はかなり浸透しており、マニラの立体交差、軽量鉄道 (LRT)、空港などが整備さ



れた。氏家さんは ODA によって日本の企業、経済も潤う、フィリピンにも恩恵が及ぶ、つまり、双方に利益を生む「ウィンウィン」の状態をもたらしていると指摘した。インフラ支援は日本政府による円の貸し付け（円借款）によるが、日本の企業に日本の財務省が費用を振り込む。その費用を途上国政府が利子分を含めて、返済するという制度である。現在、円借款全体の年間収支は貸し付ける額より、受け取る額の方が多い。つまり、途上国政府からの返済により、日本国政府は収益をあげている。日本の経済や財政が恩恵を受けているのも「国際協力」の一側面なのである。



青年海外協力隊 寺澤さん

他方、レイテ州マタグオブ町では青年海外協力隊員・寺澤萌（もえ）さんに話を伺った。寺澤さんはカカオ栽培の普及に努めているが、ココヤシより加工に手間がかかるため、村人はカカオ導入に慎重な姿勢をみせているという。これは村人が自分の生計安定を優先するという、いわば安全第一原則によるものと考えられる。私もフィリピンの地場産業に関する調査において、鍛冶屋さんたちが近代的な生産設備の導入に対して、同じような安全第一原則をとっていると、指摘したことがある¹。こうした村人の対応については、あせらずに彼らの選択肢を広げる、という姿勢で考えたらよいのではなかろうか。多様な作物生産の一つとして、カカオ栽培を勧めるのである。寺澤さんも言及した「内発的発展」の基本は住民の主体性である。住民が納得し、主体的に取り組むことが大事である²。尊大に聞こえるかもしれないが、協力隊やNGOは側面支援が限界ではないだろうか。セブ島のトレドで農民を支援するNGOの代表から、住民の自立を促すことが最も重要なことである、そして、自分たちがいかに引き揚げるか、出口戦略を常に考えていると聞いたことがある³。いかに住民の援助依存を防ぐか、協力のあり方が問われる。

その他、日本人の男性とフィリピン女性の中に生まれ、父親による養育を受けられていない日比混血児（JFC）についても学んだ。ランバラハウスの職員マリッサさん（42）は1995年、23歳の時、日本に出稼ぎ労働に行き、43歳の日本男性と知り合った。子どもを身ごもり、男の子を出産したが、子どもが1歳の時、男性は行方をくらました。そして、2013年、17歳になった息子は日本国籍を取得した。また、マリガヤハウスから紹介を受け、イスラムの女性アルミズラ・モトキさん（37）からも境

¹佐竹眞明『フィリピンの地場産業ともう一つの発展論 鍛冶屋と魚醬』、明石書店、1998、155-157 ページ。

²鶴見和子・川田侃編著『内発的発展論』、東京大学出版会、1989年

³ Masaaki Satake, "Land Reform and Rural Development: The NGO Involvement in Cebu, Philippines," 『名古屋学院大学論集』（社会科学篇）、*Journal of Nagoya Gakuin University*, Vol.43, No. 1, 2006, pp.109-123.

遇を聞いた。2002年25歳の時、マニラで、彼女は67歳の日本男性と知り合い、結婚した。翌年、女の子を出産したが、日本大使館には出生届をださなかった。男性はマニラと日本を行き来したが、08年7月に死亡した。10歳の娘さんはまだ日本国籍を取得していないが、「日本で父の墓参りをしたい、日本で勉強したい」という。マリッサさんの事例では養育放棄、アルミズラさんの事例では手続きにおける過失という点で、日本人父親に責任が見られる。1990年代末か2000年代初頭に毎日新聞のマニラ支局長だった大野俊氏（現 聖泉女子大学教授）が日比混血児について、「日本人の父親はなぜ子どもを捨てるのか」という論説を書いた。その指摘はいまだに私の心に響いている。

今回のツアーでは多くの方にお世話になった。感謝申し上げたい。マニラからレイテ島まで同行してくれたハリエット・エスカルチャ氏（KPAC代表）。その他、ランパラハウス、マリガヤハウス、カンルンガン・サ・エルマ、JICA、ILO、ラサール大学ダスマリニャス校、バリオン小学校関係者にも感謝したい。セブでは東洋大学教授マリア・バレスカス先生（元フィリピン大学セブ校教授）にもお世話になった。参加した学生たちは今回のツアーからどんなことを感じたのだろうか。これをきっかけにさらに大きく羽ばたいてほしいと願っている。

We have completed our 13 day study tour in the Philippines. We were able to understand more about Japan's cooperation to the Philippines through our visits to the office of Japan International Cooperation Agency (JICA) and the project site of a Japan Overseas Cooperation Volunteer (JOCV). Furthermore, we learned about the life of the less privileged such as those in Navotas and a rural community in Leyte through our visits to their households.

I hope that our students have learned valuable lessons from their experiences. Through their young and uninhibited curiosity, they must have confronted with various cultural, linguistic and socio-economic differences. I furthermore hope that they will reflect upon their experiences with compassion and move forward toward making a better society.

I thank all the people who supported our study tour. Special thanks go to Ms. Harriet E. Escarcha (Konkokyo Peace Action Center), Lampara House, Maligaya House, JICA, ILO, De La Salle University Das Mariñas, Balion Elementary School, and Dr. Maria Ballecas (Toyo University). Maraming salamat ho!

Masaaki Satake

Nagoya Gakuin University

フィールドに出て学ぶ

——フィリピン・スタディツアーの13日間——

引率教員 人見 泰弘 (Yasuhiro Hitomi)

フィリピンの今を学んだ13日間

フィリピン・スタディツアーでは、マニラ・オルモック・セブを13日間にわたって訪問した。マニラ滞在中は、現地で教育支援活動に携わる KPAC (Konkokyo Peace Activity Center) およびナボタスの低所得者層地域でのヒアリング、JFC (Japanese Filipino Children) 家族を支援する Lampara House と Maligaya House、ストリートチルドレンの保護や教育に携わる Kanlугan sa ERMA の訪問、本学の留学提携校であるラサール大学ダスマリニャス校 (De La Salle University, Dasmariñas) での交流と、JICA および ILO フィリピン事務所の訪問を行った。続くオルモック滞在中は、Balion 小学校での交流、村長および農業従事者へのヒアリングと農業体験、カカオ栽培の普及に取り組む青年海外協力隊員の活動現場の視察を行った。最後のセブ滞在中は、フィリピン大学セブ校 (University of the Philippines, Cebu) の学生および教員との交流機会を持った。フィリピン滞在中は大きなトラブルもなく、スケジュールは順調に進んだ。引率を終えた今、正直にほっとしている。



KPAC の活動を学ぶ



ナボタスの子どもたちと

引率教員として、学生とともに濃密な13日間を経験することができた。個人的には、さまざまな環境に置かれた子どもやその家族との出会いが印象に残ったスタディツアーだった。マニラでは、家庭の事情から路上に出ざるを得なかった子どもたちに出会った。ひとりひとりに理由があり、戻る場所がないままに、受け入れ先で生活しなくてはならない状況がそこにはあった。また国際結婚の家庭に生まれたが、両親が離れ

で暮らしている子どもと家族にも出会った。家族関係や現在の生活について聞いたところ、貧困状態にあり、そこから抜け出すには仕事や子どもの教育など多くの課題があった。オルモックでは、巨大台風による甚大な被害を経験した子どもたちに出会った。子どもたちに、台風が来た当時の様子を黒板に描いてふりかえってもらった。そのときの画には、なぎ倒された木々や家の周囲であふれ出した大量の水、風に吹き飛ばされないように必死に何かに捕まる人々が描かれていた。黒板の画は生々しく、未だにその体験が子どもたちの心に深く残っていた。マニラやオルモックの子どもたちや家族に接して、個人の力だけでは解決しがたい貧困や災害の影響を見聞きし、改めて何かできることはないかと考えることになった。

もうひとつ印象に残ったことは、移民送り出し国としてのフィリピンである。近年は看護師や介護士として、世界各地に向けて人々が国境を越えて移動していく。マニラでは、海外出稼ぎ者に向けたメッセージや彼女らを対象にしたサービスの案内を見ることがしばしばあった。空港には海外出稼ぎ者専用の窓口が設置されていたし、市街には海外出稼ぎ者からの送金を取り扱う業者もあちこちでみられた。またオルモック滞在中に、周囲の風景からはやや場違いにもみえるような、きれいな家を見ることがあった。おそらく海外出稼ぎ者を送り出し、海外送金を受けている家なのだろう。スタディツアーの行程中、「海外に出ること」がフィリピン社会の至るところに根付いていることを実感した。一方、人身売買に関する警告も何度か目にするようになった。国境を越えた移動が「当たり前」に根付いているがゆえに、その警告の深刻さが感じられた。名古屋圏にも、フィリピン系移民が数多く暮らしている。日本にいる限り、海外から出稼ぎに来た人たちの話しか聞くことができないけれども、彼女らが祖国にどのような影響をもたらしているのか、今回そうした一部を垣間見ることができた。



Lampara House の工房を見学

ラサール大学生とハンドペインティング

フィリピンでの13日間、多くの人々に出会い、話を聞き、いろいろな体験をさせてもらう機会が得られた。フィリピンの今について、多くの気づきや学びを得たスタディツアーだった。

たくさんの学びを得た学生たち

本学のスタディツアーには、学生が現地で異文化を体験しながら国際協力に対する理解を深め、「国際人」としての態度や責任を考えるという目的がある。今回のプログラムでは、フィリピンの人たちに聞き取りを行う機会が何度か得られた。学生には質問項目の設定に苦労する様子もみられたけれども、家族構成や収入など、生活構造を捉えられる質問もできた。聞き取りに慣れていない学生にとっては、何をどうやって聞けばよいのか、ましてやフィリピンという外国で、英語で話を聞くという作業は、十分に困難な作業だった。限られた時間のなかでの準備にはなったものの、その機会を彼らは十分に活用できたと思う。なにより、ガイドブックに描かれるフィリピンとは別の顔を知ることができた。学生にはスタディツアーに参加した意義を感じてもらえたらと思う。

引率教員として学生をみていると、フィリピンに到着したばかりの頃は、当地のスタッフや学生と英語で話すことにためらうような場面もみられた。それでも、子どもたちや大学生との交流、聞き取りなどの経験を積み重ねていくうちに、しだいにフィリピンでの生活にも慣れ始め、学生の姿勢も行動も変わっていった。ツアーの途中で行ったふりかえりの時間でも、台風被害や経済格差、国際移動の現状、そして自分の将来の進路に関する感想を聞くことができた。学生がさまざまな人々と出会い、考える機会を得られた。この13日間の経験は、彼らに十分な自信をもたらしたと感じている。これは、なによりの成果である。スタディツアーを引率した教員として、学生がこれからどのような道を歩んでいくのが楽しみである。



たくさんの商品がならぶ市場



Balion 小学校の子どもたちと

最後になるけれども、マニラ・オルモック・セブでの13日間を通じて、私たちを受け入れて頂いた訪問先の方々に、感謝を伝えたい。フィールドに出て学び、学生は体験的な学習をすることができた。学生が得難い経験ができたことに、引率した教員としてお礼を述べたい。とりわけ、今回のスタディツアーに長く同行していただいたKPACのHarriet E. Escarchaさんには、特別の感謝を伝えたい。Harrietさんのおかげで、学生はたくさんの学びの機会を得られました。ありがとうございました。

We express our deepest gratitude to everyone who accepted our students and provided a precious experience to them in the Philippines study tour. Our students gained enough experiences that they have never experienced in Japan. We had the opportunities and chances to study and feel Philippines.

In Manila, we visited KPAC office and interviewed some families in Navotas. The staff of the Lampara house and Maligaya house who supported the Japanese Filipinos Children and their families taught us the current situation of JFC in Philippines. The students of De La Salle University, Dasmariñas showed a spectacular performance. JICA and ILO Philippines offices gave a lecture on the international cooperation. In Ormoc, we had an opportunity to share the experiences of Typhoon Yolanda and to listen to the opinions of the farmers. In Cebu, we also had a chance to deepen the exchanges with University of the Philippines, Cebu.



海を見つめる Lapu-Lapu 像



フィリピン大学の学生と交流

Our students had a wonderful experience by the field study. They carried out the interviews, played Japanese dance performance, talked about several issues with the university students in English etc. These experiences would give the students a massive confidence and a good incentive to study harder. We have no doubt that the experiences in the Philippines study tour will encourage the growth of our students

Lastly, we show our deepest appreciation for Ms. Harriet E. Escarcha. We attribute our success to your hearty help and encouragement.

HITOMI Yasuhiro
Nagoya Gakuin University

Anong pangalan mo?

あなたとわたしを繋ぐ言葉

黒川 さくら (Sakura Kurokawa)

“Anong pangalan mo?” Whenever I meet someone here for the first time, I always say these words. Because I think if I use the Filipinos’ national language, I am able to be friends with them more than when I use English. Studying English is popular in the Philippines although they have a native language which is Filipino so I want to use their language to be friends with them.



I came here as an exchange student for 1 year. Why did I come here? Because I wanted to do volunteer activity here so I chose this country. Actually I did not find any volunteer activities for two months but when I met a

woman through Dr. Satake, my study abroad has started. The woman is Director of KPAC (Konkokyo Peace Action Center) and she introduced some volunteer activities to me such as an activity for street children. Hence I joined this study tour based on her suggestion that I should participate.

I have observed various aspects of Philippine society in our 10-day study tour – from street children to slum areas and JFC (Japanese – Filipino Children). I have seen and talked with street children before but I did not get to understand each one of them,



so I did not know their problems such as sexual harassment and abuse. The Typhoon Yolanda and politics have drastic effects on the slum-dwellers. One of topics that comes to my mind when I think of the relationship between Japan and

the Philippines was banana, but I already put JFC into my mind and my heart.

I have seen bad Japanese and good Japanese since I got interested in other countries. But, I am proud of Japanese nonetheless. I like the Philippines. I like their lovely smile, their language, and their personality.

I have met a lot of Filipino children during this study tour. Whenever I meet children, I tell them, “Anong pangalan mo?” and “Ilang taon ka na?” Of course I introduced myself in Filipino. Then, they were surprised and they flashed a smile. Actually, I still do not know enough Filipino to speak, so when they spoke in Filipino to me, I did not understand well. However, I think they give me a different response every time I speak Filipino, be it little or not. I am trying to learn their language to be friends with them.

Lastly, I appreciate everyone’s concern regarding my unexpected participation in this study tour. I am afraid that I might have caused everyone much trouble. But, I had a good experience and a good time with them. I hope that the Philippines will prosper more.



わたしの参加がご迷惑をおかけしたと思いますが、少しでもこのプログラムの手助けができていたらいいなと思います。

突然の参加にも関わらず、笑顔で受け入れてくださったスタディツアーのメンバー、またこのスタディツアーに関わってくださった皆さまに感謝いたします。

皆様に出会えたこの出会いに Mabuhay!

二つの顔を持つ国、フィリピン

名倉 萌奈 (Mona Nagura)

私の知るフィリピンは、親戚や知り合いがどこにでもいてにぎやかで、クリスマスや誕生日などの特別な日は盛大に祝い、大好きなフィリピン料理を大家族で食べる。大きなショッピングモールがあり値段も安いので、お土産をたくさん買って帰れる。私の母はフィリピン人なので、小さい頃から馴染みのあるフィリピン。誰よりも知っているつもりだった。

しかし、今回のスタディーツアーでは衝撃の連続だった。道端で物乞いをしている親子、子供の教育のために貧困と闘う家族、父親のいないJFC（ジャパニーズ・フィリピーノ・チルドレン）、フィリピンをより良くしようと働く日本人の方々、台風ヨランダの影響、…私が今まで目をつむっていたものに、初めて向き合った瞬間だった。見るもの、出会うもの全てが新鮮で心をえぐられるようだった。それとともに、このままではいけない、力になりたいという決意がより一層固くなった13日間になった。



貧富の差

やはり、印象に残ったのはフィリピンの大きな格差である。街を見渡せば高く並んだビルや大きなショッピングモールが目に入る。観光地には多くの観光客やエンターテイナー（物売りなど）で活気があふれている。みな、綺麗な服装を身にまとっている。しかし目を凝らしてみれば、破れた服を着た子供や痩せ細った女性が路上で寝ていたり、物乞いをしている人がたくさんいるのが現状である。また、経済発展した地域からすぐ横に視線をうつせば、日本でいう家とは程遠い建物、ゴミが散乱した道路、貧しい家庭で溢れかえっている。このように発展した地域とスラム街がすぐ隣同士に位置するのが“フィリピン”である。私は今回、初めて現実をつきつけられた気がした。日本でも裕福な家庭、貧しい家庭とあるが、これほどはっきりしていない。なぜフィリピンではこれほど大きく格差がひらいてしまうのだろうか。学校へ通えないため職に就くことが困難、長く続いた植民地支配など、考えれば考えるほど多くの理由がでてくるが、これといった答えはまだ私の中では見つからない。しかし分かったことはひとつ、私たちは見て見ぬふりをするのではなく、この現実と向き合い助け合わなけ

現地の大学生と手形アート

ればいけないということ。そうしなければ、この経済格差はどんどん広がり、貧困に苦しむ人が増えていくばかりである。今私たちにできることは、この事実をより多くの人に知ってもらい、そして少しでも多くの人が救ってあげたいと思えるような社会を作ることである。



フィリピンを担う子供たち

もう一つ、印象に残ったのはナボタスやストリートチルドレン施設、マリガヤハウス、バランガイ・ラブラドール小学校などで出会った多くの子供たちである。どこにいる子供たちでも、元気で優しく、人懐っこい。カメラを向ければすぐに笑顔を見せてくれるし、手を差し伸べればためらいもなく繋いでくれる。みな、同じ純粋な心を

持った何の罪のない子供たちなのである。しかし、私たちが今回出会った子供たちは、貧困を強いられ、母親または父親がいなかったり、体の一部にケガや障害を持っていたり、台風で家をなくしているなど、苦悩を持った子ばかりだった。彼らは生まれる場所を選ぶことができない。そんな不平等な世界でも懸命に生き、元気に笑う彼らにたくさんの勇気もらった。私は将来、そんな子供たちの力になりたい。今回のツアーで今まで曖昧だった夢は、はっきりと自分の道となった。海外でできることもあれば、日本でできることもあるということ。私はまだまだ未熟だが、いつか一人でも多くの人に幸せを与えられるような人間になりたい。

そして今、私たちが安全に暮らし、生活にも困らず、学校に通えていること、そして両親がいることは当たり前でないことを忘れてはいけない。

I was aching for the first time that I had eyes closed until I joined this study tour. It overturned largely about the Philippines that knew until now. I would like to thank those who taught me many things. I want to take advantage and not forget a drop in the future all that I learned this time. I want to return to the Philippines, and also become their own that has grown more. Thank you so much.

フィリピンで得たもの

水田 莉句 (Riku Mizuta)

13日間のフィリピン・スタディツアーは、自分が色々なことについて深く考えた時間であったと思う。スタディツアーに参加するまで身の回りにフィリピン人が沢山いたとはいえ、フィリピン自体の事について全く知らなかった。貧しい家庭が多く、少し外を歩けば道の端で野宿している家族、裸足で働く幼い子ども、日本では考えられない光景で子どもに恵んでくれ買ってくれと言われ、その子達に何かしてあげることも出来なかったため、とても心が痛んだ。台風ヨランダに関しても、その当時はニュースなどで見ていたであろうが、自分の記憶には残っていなかった。そのため、現地に入りヨランダによる被害を目の当たりにし、初めてそこでヨランダの恐ろしさについて考えた。バスでの移動中、ふと外を見ると建物のあちこちが破損していた。ヨランダから半年以上の月日が過ぎているのに復興にはまだまだ時間がかかる様子だった。

深刻な問題は多いが、うれしいと感じたことも多々ある。それは子ども達の無邪気な笑顔と家族、親戚、人への思いやりだ。様々な場所を訪れたが、スラム街に住む子ども達の家、ストリートチルドレン、バリオン小学校と子ども達と関係のある場所へも沢山訪問した。どこへ行っても共通して言えるのは子ども達が無邪気に楽しそうに笑っている姿だ。スラム街の子ども達は家族の収入が少なく、まともな家や食事が無い、ストリートチルドレン支援団体では家族に見捨てられていた子、虐待を受けていた子、バリオン小学校ではヨランダの影響で家などを失っていた子ども達に会った。皆それぞれ苦しい思いをしているはずだが、それを物ともせず日々明るく無邪気に生活している様に見えた。その姿を見てとても微笑ましく思ったと同時にこの子達のために、何かしてあげられたらと考えた。正直な所、今の自分にはこれといった解決策や気の利いた事をする能力がない。では、何が出来るか。自分で出した答えは、フィリピンについてもっと知るということだ。知識を付けることで解決策について考え、フィリピン政府の政策を理解し、それに少しでも自分が貢献出来たら良いと考えている。



ナボタスにて

バリオン小学校にて

人との繋がりを大切に出来た 13 日間だった訳だが、先生生徒共に仲良くなれて本当に良かったと自分は考える。最初こそ学年の壁があり、会話が弾むということが無かったが、異国で言語が通じないという心細さのせいか、日を追うごとに仲良くなったと実感出来た。エレベーターに閉じ込められる、食事が不衛生、小さな子どもが野外で寝ている様を目の当たりにするなど、精神的に辛いと思った日々を共有したからこそ仲良くなる事が出来たと考える。名古屋学院大学の人々だけでなく、スタディツアーにおいて色々な方々にお世話になった。マニラからオルモックまで引率してくれたハリエットさんを始め、ラサール大学、バリオン小学校の生徒、ストリートチルドレン、スラム街、JICA 職員、青年海外協力隊員など、多くの方々と出会えたことは自分の何よりの財産だと感じている。中々慣れずに日本に帰りたい思うことも度々あったが、スタディツアーを通してフィリピンが大好きになり、また訪れたいと心から考えている。



フィリピン大学の学生と



バスの移動中

All people I met in Philippines, it is my treasure that I was able to meet you. I came to love the Philippines. So, I want to visit Philippines again. Everyone, please be well until the day we see each other again. Thank you very much. See you again.

フィリピンでの経験

小澤 文音 (Ayane Ozawa)

今回のスタディーツアーが私にとって初めての海外だった。発展途上国に行くにあたって、衛生面や治安のことがとても心配だった。けれども、実際に行ってみてそんなことを気にする暇もなく、あっという間に楽しく 13 日間で過ぎていった。マニラについたときに交通量や屋台の多さに驚いたが、バスに乗っている自分たちを見かけると笑顔をつくり手を振ってくるフィリピン人をみてとても明るい国だと感じた。それにくわえて自分が、日本という国がいかに恵まれているのかを知ることができた。

私が一番印象に残っていることは、オルモックで過ごした 4 日間である。一番はじめに衝撃を受けたのはタクロバンからオルモックに向かうバスでタクロバンの街並みを見た時だった。台風ヨランダの影響で至る所にがれきや倒れた木々があったりした。また、漁船が陸に乗り上げている光景をみて唖然としてしまったのを覚えている。日本でも東日本大震災が起こったとき何度かテレビのニュースで見たことはあったが、実際、自分の目で見ると何も言葉が見つからなくなってしまった。

オルモックに着いて初めに行った場所は、小さな村にあるバリオン小学校というところだった。最初は慣れない外国人がいると思っていたのか、あまり笑顔を見せてくれなかった子どもたちも一緒に遊んでいくうちに人懐っこい笑みを向けてくれるようになってとてもうれしかった。小さな村でまだ子どもということもあって、英語があまり通じずに少しコミュニケーションをとるのが大変だった。でも、ジェスチャーや笑顔をつくって接すれば向こうもすぐに打ち解けてくれた。

オリエンテーションにおいて子どもたちが小さな黒板に台風ヨランダがきた時の様子を描いてそれを説明してくれた。みんな真剣に、楽しそうに絵を描いている様子を見て大丈夫なのかなと感じていたが、いざ絵や台風の様子を説明するとすごく悲しそうな、辛そうな顔をしたり、泣いてしまう子もいた。やっぱり子どもたちにも影響が大きくトラウマになってしまっている子もいるのだと感じ、切なくなった。

子どもたちと触れ合うのに疲れて少し休んでいると、一人の女の子がやってきた。私の持っていたスマートフォンに興味を持ったらしかった。その女の子と一緒にこれまでのスタディーツアーで撮った写真を見ていると一枚の私たちが泊まっているホテルの部屋の画像で女の子の動きが止まった。そして、不思議そうにじっとその画像を見つめていた。その女の子の表情を見たときに自分がいかに恵まれているのかを実感したし、それと同時にとても申し訳ないという気持ちにもなった。

オルモック滞在最終日には 2 つのチームに分かれて住宅訪問をした。村が農村なので自作農をしている人と農業労働者の人に分かれた。終わった後にシェアリングを行った。自分が伺ったところともう一つのグループが伺ったところとは全然暮らしの

豊かさが違うことに驚いた。一つは電子機器や家電もそろっている家庭で、私が訪れたのは電気が通っていないのでアルコールランプみたいなのを明りにしている家庭であった。同じ村の中なのに、ここまで貧富の差があることに驚きを隠せなかった。正直に言ってしまえば、雇う側と雇われる側なので差ができてしまうことは必然といえるが、少しでも貧富の差が減ってほしいと思った。

はじめての海外で密度の濃すぎる 13 日間を過ごした。はじめてのことがいっぱい、見るもの全てが新鮮だった。学ぶことやテーマが日によって違ったりして大変だったけれど、とても充実していた。日本と文化が全然違って苦勞した面もたくさんあったけど、日本人を、外国人をすぐに受け入れてくれるフィリピンという国はとても素晴らしい国だということを知れた。また、このスタディーツアーで発展途上国についてもっともっと理解を深めたいと感じた。得たもの、感じたことをこれからの生活に活かしたい。

I was in Philippines for 13 days. I enjoyed the study tour and learned about language and culture. I feel uneasiness in this tour at first. But, I had a very good experience. The people of Philippines were very kind and give us smile. So, I was very happy. I'll never forget these thirteen days. I want to go to Philippines again. Thank you.



これからの自分とフィリピン

後藤 春香 (Haruka Goto)

私が大学に入学してまず初めに目に飛び込んだのが、このスタディツアーだった。海外に行くチャンスは、大学一年生の間はきっとないだろうと思っていた私からすれば、このスタディツアーはとても興味を引くものだった。初めはただ、まだ行ったことのない国に行けるくらいにしか思っていなかったが、今ではこのスタディツアーに参加し、フィリピンという国に行けることが出来て本当に良かったと思う。

フィリピンという国は、私にとって初めての発展途上国だった。海外自体が初めてではなかった私は、発展途上国に行くということで覚悟もそれなりにはあった。しかし、フィリピンという国は私の想像を遥かに絶するものだった。

フィリピンに着けば、環境も景色も空気も何もかもが日本とは違い、道を歩けば路上で寝ている人がたくさんいて、物乞いをしてくる子供たちもたくさんいた。初日はこの状況にただ圧倒された。しかし、フィリピンの人々はとても心優しい人が多かった。バスに乗っていると、窓の外から笑顔で手を振ってくれる人々が多くいた。また、日本から来たということを伝えると、興味津々で様々なことを尋ねてきた。そして私は、一期一会という言葉の大切さを、フィリピンに来て改めて感じた。フィリピンの人々は本当に、人との出会いを大切にしているように感じた。

私がフィリピンを訪れて、考えさせられたことが二つある。それは、自分が今大学で学んでいることと、自分の将来の夢についてだ。スタディツアーのプログラムで多くのフィリピンの人々と交流するにあたり、様々な人に“大学で何について学んでいるのか？”ということ聞かれた。私はこの質問をされるたび、とても反応に困ったのを今でも覚えている。自分は国際文化協力学科に属し、国際的な文化、国際協力、日本が行っている国際的な支援を学びにフィリピンを訪れてはいるけれど、実際普段学んでいることを尋ねられるとすぐに答えることはできない。しかし、フィリピンの学生は、自分の学んでいることを具体的に、かつそれを将来どう生かすべきかというところまで明確だった。しかも、フィリピンで活躍している青年海外協力隊の隊員は、自分の大学四年間で学んだ知識を生かして、国際協力を行っていた。この時自分は、いかに普段自分の学んでいることを追及していないか、ということを考えさせられた。そして自分の将来の夢についても、今学んでいることを果たして今後自分の就きたい職業に生かせるのだろうか、ということも同時に考えさせられた。

このフィリピンのスタディツアーを通して、普通の観光旅行では経験することのできない、様々な貴重な経験をすることが出来た。そして、街の人々や、農家で働く人、台風で被災した子供たち、低所得層で暮らす人々、現地の大学生、フィリピンのために働く日本人の方々。このスタディツアーで、多くの人々と関わり、話を聞くことが

出来、改めて自分がこれから先の大学生活をどう過ごし、何を学んでいきたいのか、また将来の夢について改めて見つめ直すことが出来たと思う。この13日間に学んだこと、経験したことは私にとってとてもかけがえのないものとなった。このツアーに参加させてくれた両親、引率して下さった先生方、ツアーに関わったすべての人に感謝したい。

I just wanna say thank you for giving me this kind of opportunity. During our 13 days, I had a lot of precious memories and especially experiences in Philippines.

Philippines is a developing country which I have visited for the first time in my life. When I visited Philippines on the first day, I was shocked by the difference of Philippines and Japan. But, gradually I got interested to know the differences of culture.

I feel that though food, language and environment are different, people can be connected. I really want to thank Filipino I encountered this trip.

The time which I spend on this trip is my only treasure.



フィリピン訪問

榊原 寿成 (Hisanari Sakakibara)

初めての留学

僕はこのスタディツアーが初めての留学だったため、不安と楽しみでいっぱいでした。しかし、フィリピンのことは台風被害とミンダナオ島のバナナしか知らなかった。フィリピンに着いてから咳が1週間ほどとまらなかったためなるべく咳をしないようにしていたがどうにもできなかった。13日間で食事をまともにとることができなかった。初日から暑さでバテてしまい、ほとんど水しか飲めなかった。

フィリピンのマニラに着くと高層ビルが立ち並び、コンビニや大きなスーパーマーケットなどもたくさんありました。しかし、現地に行き初めてフィリピンの格差を目の当たりにしました。そこには、手を出して物乞いする子どもや道端に寝そべっている人がいて、食べものなどにハエがたかっていた。道路は下水道にゴミが詰まっていたり水はけが悪くなっているため悪臭や水たまりがありました。



SM モール・オブ・アジアはマニラ湾の埋立地に 2006 年に開店した、アジア最大の規模を誇るショッピングモール。「モア」の愛称で親しまれています。アイススケートリンク、映画館があり、ショップが 600 店舗、レストランなどが 150 店舗、駐車場が

5000 台収容となっていて、とても多くの人で混んでいました。とても 1 日ではまわりきれませんでした。

この 13 日間、日本では到底考えられないこともたくさん経験しました。マニラでのバス移動が危ない反面、おもしろかった。台風の被害があった所では、建物が壊れたままで復興があまり進んでいない所を見て、今になって自分は日本にいて何もしなかったことに恥ずかしい気持ちになった。この経験を活かしていきたいです。僕が目にした光景はこれからも忘れることがないと思います。機会があればまた訪れたいと思っています。

Thank you for everyone. I visited the Philippines for the first time. This tour was a very good experience for me. I thought I would like to make use of this experience for a good cause. I hope that I can meet Filipino people someday again. I love the Philippines!



Thank you for my precious time

水谷 奈津子 (Natsuko Mizutani)

2014年8月16日から28日の13日間、日本から飛行機で約3時間の所にあるフィリピンに行ってきました。海外は留学として違う国にいったことがありましたが、今回が私にとって初めてのスタディツアーと初めての発展途上国でした。元々国際高校に通っていたということもあり、海外に興味があるのとボランティアについて学びたいと思っていました。名古屋学院を受験する前のオープンキャンパスで、国際文化協力学科のことを知り、授業の一貫にスタディツアーがあることを知りました。私が学びたい全てのことがある、そしてスタディツアーに参加したい気持ちがあったのでこの学科に入り、参加ができると知った時は素直に嬉しく感じました。

13日間のフィリピンでの時間はきっと長く感じるかなと思っていました。しかし実際に行ってみると毎日が新鮮で、町を少し歩くだけですぐに日本との違いや、ちょっとしたことで貧富の差を感じたりし、13日間はあっという間でした。私の中で1番衝撃だったことは、着いてすぐにリサール公園を訪れた時です。事前学習や先生のお話などで、子ども達がお金を欲しいと寄ってくるということを知っていました。その話を疑って、信じていなかった訳ではありません。しかし、初日の早々に早速そのような子に出会い、わかっていたはずなのに同情してはいけないのに、衝撃そしてここがフィリピンなのだ、これが本当の現実にある現状なのだと感じました。13日間滞在し、お金を求める子や物を買って欲しいと無理やり渡してくる子どもたちに、歩いていても車に乗っていても出会いました。胸が苦しく苦しくなり、もしこの子たちに私がお金を渡したら、きっとこの子たちは私みたいな人がいる事を知り、同じことを繰り返すだろう。では自分でそんなこと言うのなら自分には何ができるのだろうと考えさせられました。

13日間の間に私たちはストリートチルドレン支援団体、ナボタスに住む子どもたちとの交流と家庭訪問、ランパラハウス、JICAのフィリピン事務所、マリガヤハウス、ILO、ラサール大学、バランガイ・ラブラドールでの家庭訪問、台風被害のあった小学校、子ども達との交流、青年海外協力隊事業地マタグオブ町の役場などを訪問させてもらいました。

ナボタスでの家庭訪問やランパラハウス、マリガヤハウス、ILOでは実際にどのような問題がいま起きており、どのように対応しているのかや現状を詳しく聞くことができました。事前学習で勉強してきたはずだったのに、実際に現地で話を聞くとひどい現状が痛いぐらい伝わってきて、心が痛くなり、何度か涙ぐむ時がありました。

レイテ島台風ヨランダの被害にあった小学校を訪問した時、子どもたちは珍しい日本人に興味を示してくれて、寄ってきてくれました。台風の被害があったのにこんな

にも明るいなんて、子どもだから台風が来て大変だったということがわからないかな？と最初に思ってしまいました。しかし、子どもたちが黒板に台風が来た時の様子を一生懸命に描いてくれて、説明してくれた時にさっき「子どもだから、、」と考えていた自分が恥ずかしくなりました。支援しないといけない立場なのに逆に子どもたちからたくさん学ぶことができました。たくさん一緒に遊んだりし笑顔をもらい、自分も笑顔になり、素敵なパワーをもらいました。普段は少し子どもが苦手な私、そして普段先生という職業にまったく憧れることはなかった自分でしたが、この時は本気で先生っていいなと感じました。今でも子どもたちと撮った写真を見ると会いたくてたまりません。

このような素敵な出会いもありました。実際に自分の目で見て聞いて、自分の身体全体で様々なことを感じ考えることができました。正直なところ、今回のこのツアーの費用は全部自分で負担をしており、自分にとってとても大きな金額でした。しかし今はアルバイトで頑張ったお金、自分の力でそれ以上分の一生価値のあるものを手に入れることができ、参加してよかったという気持ちしかありません。

This study tour was my first time visiting an underdeveloped country. Along with my friends who shared my interest we accomplished a meaningful time and worthwhile study experience. Actually living through it for myself is a different feeling compared to reading about it in the news or hearing it in my class. I'm really grateful to the people who kept supporting us and made this study tour possible. I have no words to express my gratitude for making this encounter to happen. From now on my mission is to tell my friends, family, and people around me about what I have learned. Thanks to this trip my interest about international cooperation has risen. I would love to participate again.



ここは日本じゃない

森田 聖佳 (Seika Morita)

私は今回のスタディツアーで初めての飛行機に乗り、初めての海外を経験した。こんなにも長く地上から離れ母国から離れ違う国に行くことがとても新鮮だった。高校生のころから、大学生になったらとにかくやってみたいことに力、時間をかけようと思い、このスタディツアーに参加することをすぐに決め、遂に日本を初めて離れる日を迎えた。スタディツアーに行くまでの準備の段階では、フィリピンはどんな国でどんな人がいてどんな出会いがあるのだろうとまだ自分の目で見たことのない海外に漠然と期待と興味しか持てなかった。しかしずっと叶えなかった海外への出発を楽しみにしている自分だったが、実際に飛行機に乗ってフィリピンへ着くと、ここは日本じゃないという思いが一番強く心に湧いてきた。それと同時に私はここで何を学ぶべきか、自分の将来に繋がる経験をしたいなと自分のあやふやになっていた気持ちを新たに、一日目を終えた。



J F Cについて

このスタディツアーでは主に国際機関、家庭、小学校などの訪問、観光をした。私の中で一番興味を持ったのは、J F Cについてだった。J F Cとは日本人の男性とフィリピン人の女性との間に生まれた子供のことである。なぜそのようなことが起こるかという、フィリピンは一般的に貧しい家庭が多く、出稼ぎのために日本にやってきて働き先はほとんどが水商売などであるためだ。だが、子供が生まれると、日本人の父親は教育を拒否し、お金は払うから面会はしたくない、お金は払うが自分の子供だと認知はしないと云うなどし、J F Cの子供に多くの痛みと傷を残している現実があると知った。父親探しのサポートをし、多くのフィリピン女性を助けている機関に訪問することができ、実際にJ F Cの子にも会って色々な話が聞けた。だが日本での父親探しも簡単なものではなく、父親を探すのは誕生日や漢字の名前などが必要だが、とくに漢字などで名前を覚えているフィリピン女性は少なく、支援できるのは実際のところ20~30%とスタッフの方が言っていた。この問題はとても難しい問題であり、また深刻であるのだなと思った。フィリピンには韓国人とフィリピン人との間に生まれた子供を支援する団体もあり、このような問題は日本だけでなく世界的な問題であると思った。私の中で今回J F Cの子が負う苦しみを少しだけだが知ることが出来た。フィリピンに住むJ F Cの子は10万から20万人にもおよび、それだけ多い数の子供が今も父親から拒否されているとしたら、一人ひとりの苦しみはとても想像することが出来なかつた。父親が身勝手な行動に責任を負うことなく、生まれた子供が一番苦しみ傷つくのは絶対におかしいと思う。貧しさというのは色々なものを引き起こす原因であり、金銭面でもJ F Cが苦しむ一つの要素だと思う。どうにか一人でも多くのJ F Cの子供たちが少しでも父親からの愛情を受け、せめて学校に行けるだけの教育費が支払われ、J F Cの子供が望む形にこの問題が解決していくことができることを願

う。親からうけた傷はきっと親からしか癒されることはなく、第三者がどれだけ支援と言っている、親からきちんとした責任と援助と愛情を受けないと J F C の子供の心はきっとずっと傷で一杯だと思った。実際に支援は 20～30% とスタッフの方がおっしゃっていて、きっとすべての問題が解決しうまくいくことは難しいと知った。しかし支援をしなければいつまでたっても、この問題の解決にはならないし、J F C の子供が受けている苦しみはなくなる。これからもこの問題は続くと思うが、個人的にどんどん調べて知識を増やし将来、私自身も J F C を助ける活動に関わってみたいと思った。

毎日つけた日記

一日目を終え、夜に日記を書いた。その時に今日の振り返りをしたら、せっかくのフィリピンなのにあまり英語を話していないなと反省をし、このスタディツアーを活用して二日目からなるべく英語で現地の方と交流をしようと思い、毎日乗ったバスの運転手さんやお店の店員さんに積極的に話すことが出来た。

フィリピンでは特に人と触れ合うときに日本ではあまり感じられない温かさを感じた。カメラを見ると笑顔でポーズを決めてくれる子供たち、笑顔で手を振って私たちの乗るバスを見送ってくれる子供たち、交流し終わったとき帰りにハグをしてくれた学生たち、フィリピンの人たちの盛大な歓迎と温かさを感じてくる事が出来た。

まとめ

日本は貧しい国とあまり言われない。経済も発展しているし、私の友達の中で帰る家がない子はまずいない。だがフィリピンは違った。ここは日本じゃないと思う場面がいくつもあった。整備されていない道路、道路には車の隙間を子供が通り物乞いをする。橋の上に子供が二人寝ていて、その横を通る人たちもあたりまえのように気に留めない。段ボールの上で寝ている親子を何回も見た。大きなビルが並ぶ町から少しバスを走らせれば、そこはゴミが散らかり、服を着てない子供が駆け回り、井戸の水で腕や足を洗う女性が多くいる町。ここは日本じゃない、フィリピンだと何度も思うツアーだった。これだけで終わって



生活、将来に繋げられるかを考えてみる。まず学んだことを周りの人に伝えるのも出来ることだし、J F C を支援しているマリガヤハウスなどのインターンシップに実際に行ったりもできる。どんどん行動していき未熟ながらもできることをし、同じ地球にある色々な世界をもっともっと知り様々な違いや問題、いろんなものを目にして将来に生か

していきたい。Thank you for your kindness. When I went to Philippines, I know that the Philippines is not Japan. In Japan, there are no people who sleep on the street. I was surprised of that. But, I got a lot of knowledge about Philippines. So, I think I must study and visit Philippines. We are people living on the same earth, we must know about other countries.

フィリピンでの 13 日間

山川 礼華 (Ayaka Yamakawa)

私が名古屋学院大学国際文化協力学科に入学しようと思った決め手は、このスタディツアーだ。しかし外国に長期間滞在した経験がなく、不安なことだらけだった。マラリアや狂犬病などの日本ではあまり知られていない病気や、治安の悪さなど経験したことがなく、フィリピンに滞在している間でも不安だった。

フィリピンに到着し空港を出て日本とは違う景色に戸惑った。多くの車が行き交う道路を裸足で歩く子供たち、車の窓から物を売りに来る大人。バスの窓越しの光景であるのに、私は少し怖かった。初日の観光で公園へ降りた際、ストリートチルドレンが私たちグループの近くまで来て、無言で手を差し伸べ物乞いをしてきた。事前学習で私はストリートチルドレンを調べ、現状をある程度は知っているつもりであったが、小さい子を抱きながら物を売っている子供がいたことが衝撃的であった。言葉は使わず悲しそうな顔をして近づいて来た時は、お金をあげてしまおうかとも思った。しかし、ショッピングモールを訪れた際に見た子供たちは、日本の子供たちとあまり変わりはない。ゲーム機で遊びながらご飯を食べている。そんな子供たちを見てから、路上で生活している子供たちを見ると、この差は一体何なのかとフィリピンへいる間ずっと考えていた。

私がこの 13 日間で一番印象に残っているのは、**Kanlungan sa ERMA** を訪れたことだ。施設で子供たちに 2 曲踊りを見せてもらった。きっと彼らには施設へ来る前に暗い過去や辛い出来事があったはずなのに、笑顔で踊っている姿に感動した。私たちが着ていた法被を渡すと、喜んで写真を撮ってと私の手を引いてくれた。私がフィリピンへ来て実際路上で見たストリートチルドレンは悲しそうな顔をしていた。子供同士が遊んでいる姿をあまり見かけることもなかったし、施設の子供たちのように笑っている子供たちも少なかった。そんなストリートチルドレンを保護し、しっかりとした教育と生活を受けさせる取り組みが **Kanlungan sa ERMA** だけではなく施設が増えればよいのにと考えた。さらにストリートチルドレンを生み出す社会、経済の仕組みが変わることを望む。そして、今私が日本で生活し何不自由なく大学生になれたことは当たり前でなく恵まれた環境の元にあるからだと改めて痛感した。

今回のスタディツアーでストリートチルドレンについてだけでなくフィリピンの文化についても学ぶことができた。初めはフィリピン料理も慣れなかった。ミネラルウォーターしか飲んではいけないと事前に聞いていたため、店に出される飲み物の氷ですら怖かった。米も日本と違い少し苦手だった。箸を使わずスプーンとフォークを使い、何度も箸を持ってこればよかったと思った。ショッピングモールのトイレは決してきれいではない。また日本とは違いトイレの使用に対し、お金を取られることもあった。日本の携帯が普通に使えるはずもなく、最初に泊まったペンションではロビー

でしか使うことができなかった。しかし、そんな環境での生活も貴重な体験だった。友達と部屋で今日一日あったことや思ったことを話すことができた。日本では携帯に集中してしまうことも友達と話すことで色々なことを共有することができてよかった。

今回フィリピンを訪れたことによって、私は今まで思い続けて来た『色々な世界の文化を知りたい』という気持ちが一層強まった。日本から見る世界だけでは見えるものは限られており、今回のスタディツアーでも事前の学習で調べたフィリピンとは全く違った。日本を出なければ分からないこと、感じるできないこと、見ることができないこと、聞くことができないことが沢山あると思う。今回のスタディツアーでの貴重な経験をこれからに生かし、次に繋がる自分のステップにしたいと思う。



I enjoyed the study tour. I had a lot of problems for the first time. I could not even speak English well. I could not communicate well with children. However, the language barrier does not matter. I had fun each time everyone was laughing! To laugh is important! I love the smile of children in the Philippines. But, I was sad that there are many street children. I hope that the street children will be reduced as soon as possible and children's smile increases. I had want to see their bright future!!!!

夢への第一歩

山本 泰裕 (Yasuhiro Yamamoto)

私は昔から発展途上国のことや、外国の文化に興味があり、将来は発展途上国で何かをしたいと考えていた。しかし外国はそう簡単に行けるものではなく、なかなか行く機会がなかった。そんな中、名古屋学院大学のスタディツアーを知り、自分の夢に近づくいい機会と思い参加した。最初は初めての海外ということもあり、楽しみという気持ちのほかに不安な気持ちもあった。しかし、自分が予想していた以上にフィリピンの方々は明るく気さくな方が多かった。フィリピンでは充実した 13 日を経験することができた。

私は現地で最初に日本はなんて裕福で贅沢な暮らしをしている国だろうと感じた。フィリピンのお風呂は日本でいうシャワー室と同じで、日本のように温かいお湯は浴びることはできず、水でフィリピンの方はお風呂を済ましていた。これだけでなく日本のようにトイレはきれいではなく大便器には便座がついていないものさえあった。今回参加したスタディツアーは、実際に現地に行き現地の人と交流し、現地の人生活を身に染みて体感することができた。

次に私は事前に調べていた台風 30 号ヨランダの被害のことについても自分の目で実際に見て感じ学ぶことができた。実際に台風の被害が一番ひどかったタクロバン市をバスで通過することができた。しかし、バスから見る自分の目に映った景色はネットなどの一部の写真とは全く異なったものであった。回収された瓦礫は放置され家をなくした方々は簡易的な避難場所であるテントに住み、打ち上げられた貨物船はそのままであった。このようにメディアで放送されているものとは全く異なる発見をすることができるのも、このスタディツアーに参加できたからである。

その他に青年海外協力隊の村落開発の方からもお話を聞く機会があった。自分も文頭にも述べたように将来発展途上国で何かをしたいと考えていたのでこの方のお話はとても自分のためになり、自分の考えを大きく変えた。今まではどのように支援をすればいいのか、どのような支援を必要としているかなどと、支援のことばかりを考えていた。しかし、それは大きく間違っており支援をすることにより支援された側の国は支援慣れをしてしまうので、その国のためにはならないということについても考えるようになった。では何をすればその国にとっていいことなのかはその時私にはわからなかった。その国にとっていいことというのは現地の人に支援をするのではなく、小さなことでもフィリピンという国を今以上に貧富の差がなくなり国民の方々が幸せに暮らせるように導く道しるべを作るということである。支援は 10 年や 20 年だけしか続かないが、その国をいい方向へ導けば 100 年も 200 年も先に必ず先進国としていい国になると考えた。発展途上国という言葉は発展の途中の国という意味であり支援を求めている国ではない。だからと言って放っておくのではなく、先進国に少しでも

近づくように手助けをする必要がある。発展途上国は世界でも少なくはない。日本のように毎日平和で国民が安心して暮らせるような国をより多く増やすために先進国に住んでいる私たちが発展途上国で何かの役に立つべきだと思う。そのような人になりたいとこのスタディツアーを経験して感じる事ができた。

文化や生活以外にも自分の英語力のなさにも気づく事ができた。フィリピンで過ごした13日という時間は日本には決して経験できるものではない。このツアーで私は大きく成長し、自分の夢に少し近づき自信にもなった。本当に充実した13日だった。



Through this study tour I experienced a lot of things and learned a lot. I was able to know which is unripe. But I was able to grow up than before I went to Philippines. I think this study tour is a start line of my life.

In the future I want to become “SUPERHERO” in this country as a leading player. I really had a lot of good time in this country.

4. 報告会などの資料



外国語学部 国際文化協力学科

国際協力実習

フィリピン・スタディツアー 報告会！！



8月16日から28日の13日間実施されたスタディツアー。今年の舞台はフィリピン共和国。貴重な体験と学んだこと、貧富の差や国際協力について報告します。ご参加のほど、よろしくお願いいたします。



日時★10月29日(水)

時間★9時10分～

10時40分

場所★曙602教室

ギャラリー

①



②



③



写真の説明

- ① ナボタスの子供たちと
- ② カンルガンサエルマ
- ③ マリガヤハウスにて
- ④ タール湖
- ⑤ ラサール大学の生徒と

④



⑤



①



②



③



写真の説明

- ①ILOにて
- ②タクロバン着
- ③台風ヨランダの被害
- ④ラサール大学の生徒
- ⑤ダンスを通して交流

④



⑤



①



②



③



写真の説明

- ① 台風の被害を描く子供たち
- ② 農業労働者の家族
- ③ 寺澤さんと記念写真
- ④ フィリピン大学セブ校生との交流
- ⑤ We love Cebu, Philippines

④



⑤



①



②



③



写真の説明

- ①セブのジョリビーにて
- ②ILO
- ③モール・オブ・アジアの外
- ④オルモックの市場
- ⑤バリオン学校の子どもたち

④



⑤



編集後記

今回、10人という少人数でのフィリピン・スタディツアーになりましたが、全員が体調を崩すことなく、無事に充実した13日間を送ることが出来、本当に良かったと感じています。

事前授業はありましたが、ほとんどの参加者がフィリピンという国を訪れるまで、何も知らないところから始まった、このフィリピン・スタディツアー。この長いようで短かった13日間のツアーを通し、私たちはフィリピンという国の様々な面と人々の優しさを、実際に見て聴いて触れてみることで、感じる事が出来ました。

1人ひとり感じたことは違うと思いますが、それぞれの心に深く残る、そんな旅になったのではないかと、思っています。私たちが感じたことをできる限り、この冊子に想いを乗せ、綴りました。是非、隅から隅まで目を通していただけたら幸いです。

最後になりましたが、このツアーに様々な形で携わってくださったすべての人々に、本当に心から感謝しています。ありがとうございました。（後藤 春香）

「2014年度 国際協力実習

フィリピン共和国スタディツアー報告書」

監修 佐竹 眞明 人見 泰弘（国際文化協力学科）

編集 学生編集委員

編集長 後藤春香

副編集長 森田聖佳

英語監修 Mary Angeline Da-anoy

発行 2015年2月

発行機関 名古屋学院大学 国際センター

456-8612 愛知県名古屋市熱田区熱田西町1-25

TEL 052-678-4093 / FAX 052-682-6824

Report on Study Tour to the Philippines 2014 organized by Department of International Culture and Cooperation, Faculty of Foreign Studies, Nagoya Gakuin University

Edited by Masaaki Satake, Ph.D. and Yasuhiro Hitomi, Ph.D.

February 2015

International Center, Nagoya Gakuin University

1-25 Atsuta Nishimachi, Atsuta-ku Nagoya, Aichi, 456-8612 Japan

TEL +81-52-678-4093

